# 地球の希望の光

ひぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地球の希望の光

【Ｎコード】
Ｎ９０６０Ａ

【作者名】
ひぃ

【あらすじ】
私たちが知っている地球とは、どこか似ているようで、全く違う地球に暮らす人々の話。地球は宇宙からの侵略者『ワルーモノ』によって、侵略されようとしていた。戦いあり、恋愛ありのお話です。

# ＬＩＧＨＴ　０：プロローグ（前書き）

初チャレンジのジャンルです（σ・∀・）σ
皆様、どうか最後までお付き合いくださいｍ（＿＿）ｍ

# LIGHT　0：プロローグ

新歴史２１００年。

広い宇宙の中で、青く輝く星がある。その星の名は地球。
その美しく平和な地球に、ある日突然、宇宙からの侵略者『ワルーモノ』が現れた。ワルーモノは次々と人間に攻撃を与えた。

これに対抗するため、全世界の科学者及び最高権力者が力を合わせ、対ワルーモノ部隊を各国に作った。その中でも、特別な力を持っている人間がいた。

世界は彼を『地球の希望の光』と呼び、地球上全ての生物の救世主として崇めた。
そして今、新歴史２２１０年。宇宙の侵略者ワルーモノと今も戦っている。これはそんな世界での物語である。

「地球防衛隊アジア国第１管区日の丸。略して、地防アジア第１管区日の丸……。カッコいいね、勝利」
大山　瑛子が朝の新聞を広げて、隣に座っている木山　勝利に話しかけた。勝利はむすっとした表情で、
「略してって、略しても長いし」
と、新聞にケチをつけた。
勝利と瑛子は高校１年生。夏休みを終え、今日から新学期が始まった。瑛子はハサミを持ち出して、ある新聞の記事を切り抜こうとしていた。
「何してんだよ」

「切り抜き。あたしね、勝利のアルバムを作ってるの」
チョキチョキと、リズムの良い音を奏でながら、瑛子は自慢気に言った。勝利は呆れた顔をした。
「アルバムって悪趣味な」
「どうして？　恋人の活躍を記録に残したいのは当たり前でしょ」
瑛子はふんふん～、と鼻歌を歌いながら、カバンから分厚いアルバムを取り出した。開いてみると、そこにはびっしりと新聞の切り抜き、雑誌の切り抜きが貼られていた。
「またコレクションが増えました～」
上機嫌の瑛子は、ニコニコと満足そうに笑った。逆に勝利はうんざりとした表情になった。
「いいよな、お前は。全部、前向きに考えちゃうもんな」
「それがあたしの良いところだよ」
勝利は、はぁ……と溜め息をついた。そして、くしゃくしゃと瑛子の頭を撫でた。瑛子はくすぐったそうに笑った。

新学期始めの授業を終え、勝利と瑛子は街を歩いていた。今日は前から、瑛子の買い物に付き合う約束だった。瑛子はいろんな店に入っては
「ね、これどう？」
と、勝利に意見を聞た。そのたびに勝利は、面倒くさそうに
「いいんじゃね」
と、答えていた。
（どうせ俺が意見したって聞かないくせに……）
勝利はだるそうに瑛子の後をついて歩いた。勝利の言う通り、瑛子は勝利の意見が聞きたいわけではない。ただ、そういうシチュエーションを楽しんでいるのだ。瑛子曰わく、そういうやり取りって恋人同士って感じがするでしょ？

「勝利、お腹空いたね。何か食べよっか」
瑛子は両手に大きな紙袋を持っていた。勝利がすっと手を差し出した。
「貸せよ」
「あ、ありがと～」
瑛子は片方の荷物を勝利に渡し、商店街に並んでいる喫茶店に入った。勝利が後ろに付いて行こうとしたとき、キィィンと耳の奥を刺激する高い音が勝利の耳に入った。
「……来る。瑛子！」
勝利は店に入った瑛子を呼んだ。瑛子は勝利の元へ戻った。
「奴が来た。悪いけど俺行くから」
「あ、うん。頑張ってね！」
勝利は手に持っていた荷物を瑛子に渡し、瑛子の額に軽くキスをした。そして、ひゅんっと風を切るように走っていった。あっという間に、瑛子の目の前から姿を消した。

奴は駅前の広い公園で暴れていた。すでに一般市民は避難されていて、公園に残っているのは、このアジア国第１管区日の丸の軍隊と奴……ワルーモノだけだ。
ワルーモノは、体長１０メートルはあろう大きさだった。体全体を赤色の硬い皮膚で覆っていた。大きな口からは鋭い牙が見えた。手足の爪も鋭く、ワルーモノがじたばたと騒ぐたび、空気が裂ける音がした。
ワルーモノは地面が揺れてしまうぐらいの、大きな鳴き声をあげた。揺れた地面に足を取られて、公園の軍隊達はなかなか手が出せない。すると空から数機の戦闘機がやって来た。
対ワルーモノの戦闘機だ。

各機とも一斉にミサイルをワルーモノに撃ち込んだ。ワルーモノは悲鳴に似た声を上げたが、ミサイルの効果はあまりないようだ。すぐに体制を整えて、空気を吸い込んだ。そしてかぱっと大きな口を開けた。そこから光の熱線が発射され、空を飛んでいた戦闘機3機に命中した。3機のパイロットは脱出ポットで運良く逃げられたが、操縦不能になった戦闘機が周りの建物に墜落し、あちこちで炎が上がった。青かった空が、煙の影響で真っ黒に染まった。

「あーあ、仕事増やしちゃって」

公園に突然男子高校生が現れた。軍隊の1人が、男子高校生を止めた。

「一般市民は立ち入り禁止だ！」

「あれ？　あんた新米さんだね。俺を知らないなんて。聞いたことない？　『地球の希望の光』って言葉」

男子高校生はにんまりと笑うと、すたすたと軍隊の前線に向かった。

「『地球の希望の光』だって……？　もしかして彼が……彼が、木山　勝利？」

前線に立った男子高校生、勝利はゆっくりと目を閉じた。

『全軍隊に告ぐ。今からこの場を離れろ。あとは俺の出番だ』

勝利の声が、軍隊全体に響き渡った。そしてあちこちで撤収の準備を始めた。

「さぁ、ワルーモノ。こっからは俺が相手だぜ？」

勝利はふっと涼しく笑うと、地面を蹴り上げ、ワルーモノの顔の高さまで飛び上がった。そして勝利の左足の蹴りがワルーモノの顔面に直撃した。メキメキッとワルーモノの骨が割れる音がした。ワルーモノはその場に倒れ込んだ。勝利はすたっと空中から地面へと落ちた。

（これで終わりか？）

勝利が構えていると、ワルーモノはピクピクと体を震わせ、再び体を起こした。

今度はワルーモノの大きな右足が、勝利の頭上に下りてきた。足で

潰しにきたのだ。勝利はぐっと両手でワルーモノの右足を支えた。
ぐぐぐっと、ワルーモノは右足に力を加えた。と同時に、勝利の腕にもワルーモノの力がかかった。勝利はふんっと勢いをつけて、ワルーモノの右足を押しのけた。ワルーモノはそのまま、後ろのほうへ倒れ、仰向けの状態になった。
「そろそろに終わりにしようか」
勝利はぐっと左手に握り拳を作った。すると、どこからともなく小さな光が集まり、勝利の左手は眩しいほどに光輝いていた。
「じゃあな」
勝利はその拳を空高く上げ、一気にワルーモノの晒された大きな腹に一撃を食らわせた。その場が光の白一色に染まった。
「ピギャァァァ！」
ワルーモノは耳が裂けるくらいの悲鳴をあげて、灰となって消えた。
「……任務終了」
勝利はするっと、制服のネクタイを外した。
遠くに退却した軍隊から拍手がわき起こった。先程の新米軍人が唖然として、望遠鏡を通して勝利を見ていた。
「信じられん……彼はまだ１６歳の少年だろ。一体どうしてこんな力を……」

『地球の希望の光』
その正体は、アジア国第１管区日の丸で、普通の高校に通っている１６歳の男の子。
木山　勝利なのだ。

## LIGHT　1：目的

日曜日。
瑛子は朝早くから駅前に立ち、ある人を待っていた。そのある人とは……。
「勝利ーっ！」
（大声で呼ぶな、ばか）
勝利は顔を赤くして瑛子の元へ走った。瑛子が不思議そうな顔をした。
「勝利、顔赤いよ？　大丈夫？」
「大丈夫だから、あ、あんまり近づくな」
勝利は瑛子より2、3歩前に出て改札口へと向かった。瑛子は、何で何で？　と頭にクエスチョンマークを浮かべて聞いた。勝利と瑛子は駅員に定期券を見せ、2番ホームへと向かった。

「俺があんまりベタベタするの、好きじゃないって知ってるだろ？」
ガタン、ゴトン……と、2人を乗せた電車は見慣れた街の中を走り出した。勝利たちは向かい合っている座席を選んで座った。瑛子が勝利の隣に座ろうとすると、勝利がやめろと言うのだった。
「何で？　私たち付き合ってるんだよ。……まさか、私以外に女の子が！？」
「そんな奴いねぇよ。ただ単にひっつくのは慣れてないだけ」
（何よ。ワルーモノと戦う前は、必ず私にキスするくせにっ）
瑛子は頬を膨らませて窓の外を見た。だんだんと街並みから、山や田んぼなどの田舎風景に変わっていった。
「……あれ」
瑛子はぼーっと外を見て気が付いた。勝利が、どうした？　と聞く

と、瑛子は何でもないよ、と答えた。
（よく考えたら、勝利が戦う前って、たいてい、私と一緒にいるのよね。私って悪い奴を呼び寄せちゃう空気なのかな……）
「何考えてんだよ」
勝利の言葉に、瑛子ははっと我に返った。じっと勝利の真っ直ぐな目が瑛子を掴んでいた。
「たいしたことないの」
「ふぅん？　だったら何だ、これは？」
勝利がちょいちょいっと下の方を指差した。瑛子が見ると、瑛子はしっかりと勝利のズボンの端を掴んでいた。慌てて瑛子は手を離した。
「昔から変わんねぇな、その癖。言ってみろよ。聞いてやるから」
「う……。あのね」
瑛子は目線を下に落として話した。
「勝利がワルーモノと戦う前って、たいてい私と一緒にいるよなって。私って悪い奴を呼び寄せちゃう空気なのかなって……思って」
「……それだけ？」
瑛子はこくんと頷いた。勝利はふぅと息を吐いた。
「そりゃ当たり前だ。よく考えろ、俺たち毎日一緒にいるんだぜ？」
「え？　……あ、そっか」
瑛子は暗い気持ちから、すぐに明るい気持ちに変わった。
「そっかそっか。そうだよね。私たち毎日一緒だもんね」
瑛子がにこっと笑った。いつもの笑顔が戻り、勝利はほっと安心した。
「あ、次だよ、勝利」
「あぁ」
電車は街とは正反対の、大きな山に囲まれた無人駅に着いた。緑一面の景色に、ぽつんと白い建物が見えた。今からその建物に向かうのだ。

「じっちゃーん、来たぜー」
勝利がドアを開けて中に入った。瑛子も後に続いた。
建物の中は真っ暗だった。勝利は壁に手を付いて明かりのスイッチを探した。
そのときだった。ひゅんっと風に乗って、勝利たちに向かって何かが飛んできたのだ。勝利はいち早くそれに気付き、瑛子の手を取って避けた。
「勝利……」
瑛子が心配そうに勝利を呼んだ。
「じっちゃん、いるんだろ、出てこい！」
しんとしている空気に、勝利の声が吸い込まれた。
『……見事な速さだったぞ、勝利』
パッパッパッと、あちこちからスポットライトが、一つの場所に集まった。その光の中に、白い髭を生やした人物が立っていた。
「お祖父様だ」
瑛子がびっくりして言った。勝利はずんずんとその人物に近づいた。
「じっちゃん、悪ふざけはやめろよな。なんだ、このナイフ！　瑛子もいるんだから」
『悪ふざけなどではない！　これは特訓なんじゃ！』
勝利の祖父は、手にしているマイクに、大きな声で答えた。キーンと嫌な音が響き、勝利と瑛子は耳を押さえた。
「木山所長、そのような声を出してはいけませんよ」
パチッと明かりが付く音がした。暗闇に慣れていた目には、この明るさは地獄のようだった。
「南さん！」
勝利は電気を付けた人物の名前を呼んだ。南は、お久しぶりね、とにこっと笑った。瑛子がぎゅっと勝利の腕を掴んだ。
「あら、瑛子ちゃん。いらっしゃい」

「……どうも」
「え、瑛子、離れろよ」
勝利がぐいっと瑛子の腕を外した。瑛子が、ぶーぶーと文句を口にした。
瑛子が南が嫌いだった。その理由は……。
「南さん、いつこっちに帰ってきたんですか？」
「昨日帰ってきたのよ」
勝利の喜びようは、瑛子の目には、まるで久しぶりに恋人に逢ったような喜びのように映った。瑛子は恋のライバルとして南を見ているのだ。
「立ち話もなんじゃ、奥に入れ」
勝利の祖父、木山所長が2人を招き入れた。勝利たちは木山所長の後に続いた。

通された場所は、2階の事務所。1階と違ってここは、書類やらファイルやらがいっぱいだった。
「じゃ腕を出してね」
南が勝利に優しく言った。勝利が腕を差し出すと、南が注射器を取り出した。
「なぁじっちゃん、注射じゃない方法ってないの？　俺、あんまり好きじゃない……いてっ！」
勝利は針の痛みで眉間にしわを寄せた。
「文句を言うな。注射のほうが、効きがいいんじゃ」
木山所長はカタカタとキーボードを打ち込んだ。瑛子はお茶を飲みながら、勝利の横に座っている。
「はい、おしまい」
南が注射器を片付けた。勝利はぺこりと頭を下げた。
「南さん、今の注射って？」
瑛子が南に質問をした。
「これは……そうね、精神安定剤のようなものね」

南はぎしっと自分のデスクに座った。
「瑛子ちゃんはここに来るのは初めて？」
「あ、はい……」
瑛子は何も知らないことを、南に知られたのが恥ずかしくて俯いた。
「本当は関係者以外立ち入り禁止なんだけど……」
南はちらっと木山所長を見た。木山所長はこくんと頷いた。
「瑛子ちゃんは勝利の恋人じゃ。知っておいてもらったほうがいいのぅ。それに恋人以前に、この星に生きている者として聞いておいたほうがいい」
瑛子は緊張して南の言葉を聞いた。
「じゃ、木山所長に代わって私が話をするわね」
南は組んでいた足を組み替えた。
「この地球が『ワルーモノ』に攻撃を受けているのは分かるわよね。それによって世界中がひとつになって、ワルーモノを倒そうとしていることも」
瑛子はこくんと頷いた。
「対ワルーモノ部隊として、世界中に部隊が作られ、ここ日の丸には、地球防衛隊アジア国第1管区日の丸っていう部隊が作られたの」
「あ、この間新聞で見ました。勝利が選ばれたんですよね」
瑛子は自分のことのように嬉しそうな顔をした。勝利はこの間、瑛子が学校で新聞の切り抜きをしていたことを思い出した。
「そうね、勝利君が部隊の一員に選ばれたのよね。おめでと」
南が目を細くした。勝利は顔を赤くして笑った。瑛子はむっとして、話を続けてください、と南に迫った。
「まず敵を知らなきゃいけないってことで、ワルーモノの研究をする研究所があちこちで作られたの。ここ木山研究所は、その中でも古株で常にトップの位置にいる場所なの」
南の説明に木山所長が、古株は余計じゃ、と口にコーヒーを運んだ。
「確かに古株。じっちゃんが生まれる前からあったんだろ？」
勝利がお茶菓子として出されたクッキーに手を伸ばした。勝利の好

きなチョコチップクッキーだ。もう1枚手に取り、瑛子に渡した。
「そうよ。ワルーモノが現れる前からここはあったの。だから１００年以上前から……かしら？」
木山所長が南の説明に頷いた。そして懐かしそうな顔をした。
「わしのじいさんが建てた研究所じゃ。時が経つのは早い。わしはいつの間にかじいさんになり、孫がおる」
「そんな昔に、ワルーモノが襲ってくるって分かってたんですか？」
瑛子がこくっと2杯目のお茶を飲んで聞いた。南は首を振った。
「いいえ。昔は天文学の研究をしてたのよ。まぁそのおかげで、ワルーモノの発見が出来たけどね」
南もコーヒーに口を付けた。
「そっか。じゃあ、1番にワルーモノを発見出来たから、お祖父様の研究所はすごいって言われるんですね」
「そうね、それともう一つ理由があるの」
南はぴっと勝利に向かって指を差した。勝利はびっくりして、食べていたクッキーを喉に詰まらせた。
「勝利君の体に、もう一つの理由があるのよ」
「ここからはわしが話そう」
木山所長が真面目な顔をして話し出した。
「勝利が『地球の希望の光』となったのは、わしのじいさんが開発した薬のせいなんじゃ」
木山所長は席を立ち、大きな棚から1つの小さな箱を持ってきた。箱を開けると、ピンク色の液体が入っている小瓶があった。
「これが『地球の希望の光』の正体。これを体内に入れることで、体力、筋肉、手足の動き、神経などが進化するのじゃ」
「えーっと、つまりワルーモノをやっつけられる力が生まれた……ってことですか？」
「そうじゃ。まだ赤ん坊だった勝利に、わしがこの薬を打ったのじゃ」
木山所長は昔のことを思い出していた。勝利はケッと悪態を付き、

余計なことしちゃってよ、と呟いた。
「でもどうして勝利が『地球の希望の光』になったんですか？」
瑛子が木山所長に聞いた。木山所長はまた一段と真剣な顔をした。
「運命なんじゃ」
「運命？」
「そう。これは木山家の運命。……瑛子ちゃんは勝利の父親を知っておるかね？」
瑛子は勝利の父親を思い出してみた。
「は、はい。小さい頃に遊んでもらったことがあります。でも……」
そう口にして、瑛子は黙った。ちらっと勝利のほうを見た。瑛子の視線に気付いた勝利は、ふっと軽く笑った。それを見た木山所長は、ふむっと唸った。
「どうやら知っておるようじゃな。勝利の父親、勝貴は初代『地球の希望の光』だったが、ワルーモノによってこの世を去ったのじゃ」
木山所長の言葉に、瑛子は驚きの声を上げた。
「勝利のお父さんって『地球の希望の光』だったんだ……」
「そうなんじゃよ。勝貴が中学生のころ、わしが薬を打ったんじゃ。あの時代は特に戦いが酷かった……」
木山所長は静かにコーヒーを飲んだ。しばらくの間、４人に沈黙がおりた。その沈黙を破ったのは勝利だった。
「とにかく、じっちゃんのじっちゃんが薬を開発してそれ以来、代々、木山家は『地球の希望の光』を受け継ぐことになってんだよ」
勝利は勢い良くお茶を飲み干した。瑛子は少し寂しそうな顔をした。
「運命……か。ね、勝利。私たちが出会うのも運命なのかな？」
「はぁ？　そんなこと知らねぇよ。神様に聞いてください」
ひどーい、と瑛子は涙ぐむ真似をした。勝利は舌を出して笑った。
「瑛子ちゃん」
木山所長が瑛子を呼んだ。その声は、今までの真剣な声ではなく……。
「勝利のこと、よろしく頼むよ」

孫を大事に思う優しい祖父の声だった。瑛子はくすっと笑った。
「任せてください。私は勝利と出会えたことは運命って思ってるんです。私、こんなに勝利のことが好きですから」
木山所長も瑛子につられて笑った。
「勝利が地球を守る理由。ただの運命ではなくて、瑛子ちゃんがここで生きてるから……なのかもな」
そうだと嬉しい、と瑛子は笑った。勝利は顔を赤くしてそっぽを向いた。
「勝利君、忘れないうちにこれを」
南が紙袋を勝利に渡した。瑛子が2人の間に首を突っ込んだ。
「これは勝利君の薬。私たちで言うと、サプリメントかな」
瑛子が質問する前に南が説明をした。瑛子は少しむっとした。
「注射では補えない部分があるからね。また1ヶ月したら来てね」
「はい、ありがとうございます。じゃ、じっちゃん行くわ」
勝利は南に礼を言い、木山所長に手を振った。瑛子はぺこりと頭を下げた。木山所長はひらひらと手を振り返した。そのときだった。
『敵接近中！　敵接近中！』
研究所内の警告ランプが赤々と光った。勝利は高校生の顔から、すぐに地球の救世主の顔つきになった。
「南さん、場所は？」
「場所は……B160！　この間新しく出来た遊園地のほうよ」
南が座標のモニターを見ながら教えてくれた。それを聞いた瑛子ががっかりした声を出した。
「あの遊園地、まだ行ったことないのに……」
「何言ってんだよ。いいか、瑛子はここにいろよ。じっちゃん、行ってくる！」
勝利はお決まりの、瑛子の額に軽くキスをして研究所を飛び出した。
瑛子はキスをされた場所をさすった。
「……勝利のやつ、いつもそんなことをしとるのか？」
木山所長が呆れた声を出した。瑛子は恥ずかしそうに頷いた。

（遊園地か……。まぁた、ド派手に暴れてるんだろうな）
研究所を出た勝利は、ぐっと腰を落として足に力を入れた。すると小さな光が足の裏に集まった。そして、よしっ、とタイミングを付けて地面を蹴り上げた。勝利の体は、大砲が発射されるように一直線にワルーモノへ飛んでいった。
（注射のおかげで体が軽い。じっちゃんの言うとおり、効きが早いんだな）

遊園地では逃げ惑う人々と、ワルーモノに対抗する軍隊とで、ごちゃごちゃになっていた。泣き叫ぶ声や銃声が入り混ざった。
「今の状況見たらさ、遊園地で遊んでる場合じゃないでしょ」
勝利はふぅ……と溜め息をついて遊園地の中に入った。向かってくる人々は皆、目を赤く腫らし、大声で叫んでいた。勝利はその人混みの中をすたすたと涼しい顔で歩いた。しかし、眉をぴくりと動かして足を止めた。くるっと振り返ってみると、見慣れた女の子が勝利に向かって走ってきた。
「げっ。瑛子！？」
「えへへ、来ちゃった」
瑛子は肩で息をしながら勝利の隣に並んだ。
「お前っ、じっちゃんの所にいろって言っただろ！」
「だ、だって……見たかったの」
瑛子が泣きそうな顔をして勝利を見た。勝利はぴくぴくと眉を上げていた。相当頭にきているようだ。
「ここは危険なんだぞ！　お前はすぐ帰れっ」
「やだよ！　私見たいんだもん。勝利が戦うところ」

「あーのーなぁ！」
「お願い！　……今日ね、私すっごく恥ずかしかったの。勝利の彼女なのに、何も勝利のこと知らないの。南さんに全部教えてもらって、恥ずかしかったの」
瑛子はすぅっと息を吸った。
「だから知りたいの、勝利のこと。全部知りたいのっ。お願い！」
「……」
勝利はじっと瑛子を見た。瑛子の瞳は真剣そのものだった。しばらく考えた勝利は、そっと瑛子を抱きかかえた。
「きゃっ！」
「ちんたら歩いて行かない。飛ぶから舌噛むなよ」
ひゅんっと勝利は瑛子を抱いてワルーモノへと飛んだ。

ワルーモノは観覧車を踏み倒して、誇らしげに鳴いていた。その鳴き声は、空に割れ目ができるぐらい強烈なものだった。
「瑛子はここにいろ。絶対出てくるなよ」
勝利は瑛子を植木の下に下ろした。瑛子はこくんと頷いた。勝利はくしゃくしゃと瑛子の頭を撫でてた。
「さぁて、悪者退治をしに行きますか」

暴れているワルーモノは、前と比べて一回りも二回りも大きかった。体は硬い突起物で守っており、全身は緑色に染まっていた。赤い大きな目が、ぎょろぎょろと辺りの様子をうかがっているようだった。長い尾がパシンッと地面を叩いている。
「俺が相手になるぜ」
勝利は前回と同じように、ワルーモノの顔の高さまで飛んだ。そして1発目の蹴りを食らわそうとした。しかし、ワルーモノの赤い目が光り、体を守っていた突起物と同じものが、ボコボコッと顔の回りに集中して生えたのだ。
（やべっ！　このままじゃ）

勝利の頭は気付いたが、足を止めることは出来なかった。勝利の足に突起物がずぶりっと刺さった。勝利の足からは、だらりと血が流れた。
「っ！！」
「勝利！」
瑛子が恐ろしくなって植木の下から出てきた。
「バカッ、外へ出るなっ」
勝利は突起物から足を抜いて叫んだ。
（このまま、やられるような弱い奴じゃないぜ）
勝利はそのまま地面に降りた。今度はぐっと拳に力を入れて、ワルーモノの腹を目掛けてパンチを放った。しかしまた先ほどと同じように、突起物に守られ奥まで届かなかった。勝利のダメージが増えてしまった。
（いってぇ……でも、なるほどね）
勝利はぺろっと拳から流れた血を舐めた。そしてまた、ワルーモノの顔の高さまで飛んだ。ワルーモノは大きな口を、ニタァと嫌らしく開けた。まるで勝利を馬鹿にしているようだ。
「化け物の分際で調子に乗るなよ」
勝利は怪我をしていない足で蹴りを放った。当然、顔には体を守っている突起物がたくさん生えた。勝利は足の蹴りを突起物に当たる寸前で止め、くるっと空中で後ろに体を回転させた。そして回転させた勢いで顎にあたる部分に蹴りを食らわせたのだ。突起物は顎にはなく、勝利の蹴りがワルーモノの体に当たった。ワルーモノは後ろにひっくり返った。
「へっ。ざまぁみやがれ」
勝利はすたっと地に足を付けた。だらだらと怪我をした足からは血が流れている。
（……ちょっとクラクラするな）
勝利は頭を支え、ワルーモノに近づいた。思い切り蹴り上げたので、そう簡単にワルーモノは起き上がらないだろう。勝利はまた拳に力

を入れた。小さな光が勝利の拳に集まり、眩しいほどに輝いた。
「何、あれ。勝利の手に、星が落ちてきたみたい……っ！」
瑛子は急に胸が苦しくなった。
（今まで何ともなかったのに……）
瑛子は立っていられなくなり、膝を地面に付けた。
（痛いっ！　痛いよ、勝利っ）
瑛子は震える手を勝利に向かって伸ばした。勝利は光っている拳でワルーモノにトドメを刺すところだった。高く上げられた拳は、より一層輝き、その場を白一色の世界に変えた。一瞬にしてワルーモノはちりちりになり、姿を消した。
「はぁはぁ……任務終了……」
勝利はふっと瑛子を見た。瑛子は地面にうつ伏せになって倒れていた。
「瑛子っ！」
勝利は急いで瑛子に駆け寄り、すぐに仰向けにやった。うつろな目で瑛子は勝利を見た。
「ワ、ワルーモノは？」
「もういない。どうしたんだよ、何があった？」
「わ、分からない……の。急に胸が痛くなって」
瑛子はすっと目を閉じた。そしてまた目を開けた。
「勝利、何か来るよ」
「え？」
瑛子が口にした瞬間、ふわっと冷たい風が勝利たちの頬をかすめた。空が黒くなった。
「何だ……？」
「来るよ、大きな力……」
「瑛子？　おい、お前どうしちゃったんだよ」
うわ言のように呟く瑛子を、勝利はぎゅっと抱きしめた。瑛子は勝利を見ているようで、どこか遠くを見ていた。
（やっぱり連れてくるんじゃなかった！　俺が悪いんだ）

「お前が『地球の希望の光』という者か？」
突然、空から冷たい声が聞こえた。勝利ははっとして空を見上げた。そこには、人間の姿に、竜のような青白い尾が生えているワルーモノが立っていたのだ。
（何だあいつは。今までのとは、全然違う。このピリピリした感じ……あいつ強いっ！）
「お前は誰だ！」
勝利は細かく震えていることを、ワルーモノに悟られないよう強気で叫んだ。空から現れたワルーモノは、くすりと笑った。
「なんと小さき光。それで我々を倒すというのか」
くすくすと冷たく笑うワルーモノは、すーっと地面に降り立った。
「我はリヴァウス。ワルーモノ様四天王のひとり」
「四天王……だって？」
（四天王ってことは、あいつみたいな奴があと3人いるってことか？）
勝利はごくんと喉を鳴らした。たらっと冷や汗が背中に流れた。
「お前ら、何でこの星を狙うんだ！」
勝利の言葉に、リヴァウスは冷たく笑った。そしてふわっと宙に浮いた。
「我らの目的を果たすため……」
「目的？」
「我らの母『コア』を取り返しに来た」
（母『コア』？　取り返しに来ただと？　何が何だか分からない！）
勝利は頭の中がぐちゃぐちゃになってしまった。ただぎゅっと瑛子を抱きしめていた。瑛子は相変わらずうわ言のように、来る来る……と遠い空を見ていた。そんな瑛子にリヴァウスが気が付いた。
「そこの娘、お前は……？」
そう言いかけて、リヴァウスの背中に何かが当たった。それは日の丸軍隊による攻撃だった。
「力ない者は、ただ地面に平伏すだけ……」

リヴァウスはすっと手のひらを、後ろのほうに向けた。勝利は急いで念を飛ばした。
『全員退避！　今すぐ逃げろっ！』
しかし念を飛ばす前に、リヴァウスの攻撃が軍隊に命中してしまった。山が崩れるような音が、勝利の心を震わせた。
「……このっ！」
勝利は舌打ちをしてリヴァウスに飛びかかろうとした。しかし、ぐいっと瑛子に掴まれた。
「瑛子！」
「だめ。まだ戦ってはだめ」
瑛子はじっとリヴァウスを見て言った。（瑛子、お前元に戻らないのか……？）
「今回は様子を見ただけ。お前のような小さな光、我らの邪魔にもならん」
リヴァウスは高らかに笑い。すーっと空気に溶けて消えた。と同時に瑛子は、プツンと糸が切れたように意識がなくなったのだ。

## LIGHT　2：母『コア』

「瑛子……」
太陽が沈みかけたころ、勝利は研究所近くの病院にいた。今日の授業を終え、瑛子の様子を見に来たのだ。

四天王リヴァウスが現れた日から、一週間が経った。あの日、突然意識を無くした瑛子は、すぐに木山研究所に運ばれた。
「じっちゃん、瑛子がっ！」
勝利は瑛子を抱きかかえて研究所のドアを開いた。すぐさま、瑛子は木山所長の知り合いの病院に運ばれ精密検査をした。幸い、命に別状はなく、しばらく入院することになった。そして一週間が経ったのだ。

勝利は病室の空気を入れ替えようと窓を開けた。ひんやりとした風が勝利の体にしみた。季節はすっかり秋になっていた。
「……勝利」
瑛子の声が聞こえた。勝利はベッドの横にあるパイプ椅子に座った。
「目ぇ覚めたか」
これ、南さんから……と、勝利はケーキが入った箱を瑛子に渡した。
瑛子は起き上がり箱を受け取った。
「ありがと。あ、私の好きなチーズケーキだ」
瑛子の声が弾んだ。勝利はふぅと息を吐いた。
「勝利、ごめんね」
「なにが？」
瑛子はケーキの箱を備え付けの棚の上に置いた。そこには見舞いに来ていた、瑛子の祖母が生けた花があった。

「お祖母ちゃんが勝利に言ったこと」
瑛子は申し訳なさそうに話した。勝利はくすっと笑った。
「そんなことかよ」
瑛子が入院して翌日、瑛子の祖母、イチが勝利の頬にばちんと大きな音を出して叩いた。くっきりと勝利の頬に手の跡が残った。イチの小さな目には涙があった。
「お祖母ちゃんっ」
瑛子が驚いてイチの腕に抱きついた。勝利はぺこりと頭を下げた。隣にいた木山所長、南も頭を下げた。
「この度は私の孫が大切な瑛子さんに、大変ご迷惑をかけまして申し訳ございません」
木山所長がはっきりと誠意を込めて謝った。イチは態度を変えず、ぎろっと勝利を睨んだ。
「私はいつかこうなると思っていました。今までは瑛子の思うとおりにやらせていましたが、もう我慢ができません。もう二度と瑛子に会わないでください」
「お祖母ちゃん、何言ってるの？　何勝手に決めてるの！」
瑛子が鼻声になりながら、イチに問いただした。勝利はぐっと拳に力を入れた。
「本当に……本当にすみませんでした」
勝利は深々と謝った。イチは勝利に背を向けたままだった。イチの背中が、
「もう帰ってください」
と、勝利たちに話していた。木山所長と南はもう一度謝罪をし、病室を出た。勝利はゆっくりともう一度頭を下げ、病室を出ようとドアの取ってに手をかけた。
「勝利、待ってよ……」
瑛子の声が勝利の背中に刺さった。
「ねぇ、勝利、また来てよ。絶対だよ」

「瑛子っ、お前はまだ分からないの！　由美子たちと同じ目に遭うのよ！」
イチの怒鳴り声が瑛子を止めようとした。
由美子たち。それは瑛子の両親たちのことだ。瑛子の両親は街でワルーモノの襲撃に遭い、この世を去った。勝利はまだ『地球の希望の光』として目覚めてはいなかった。両親を亡くした瑛子は、イチに育てられたのだ。
イチの声に瑛子は耳を貸さなかった。
「嫌だよ、勝利」
瑛子の切ない声に、勝利の体がびくんっと反応した。
（瑛子……）
勝利は瑛子を抱きしめたい気持ちでいっぱいになった。しかし、自分の未熟さで瑛子を危ない目に合わせてしまったことがひっかかり、勝利は振り向きもせずに病室を後にした。

「仕方がないんだ。俺の未熟さが瑛子を傷つけたんだ。もう会うなって言われたのに、ここにいるし」
学校から帰ると、勝利の家に電話が鳴り響いた。瑛子からだった。電話を通して瑛子が泣いているのが分かった。勝利は会いたい気持ちが膨れ上がり、家を飛び出していた。
「未熟なんて言わないで。当たり前じゃない。まだ高校生なんだよ。だけど勝利は頑張ってる。私は知ってるもの」
瑛子はぎゅっと勝利の手を握った。瑛子の手を通して、冷えた勝利の体に瑛子の暖かさが伝わった。ぽろっと勝利の笑顔がこぼれた。
「瑛子には助けてもらってばっかだな」
「何言ってるの。助けてもらってるのは私たちのほう。ね、あのワルーモノはどうやって倒したの？　体中トゲだらけだったじゃん」

瑛子のいつもの調子に勝利は安心した。
「あのワルーモノ、トゲは厄介だったけど、反応が遅いんだ。しかもトゲは同時に違う場所には出なかったし。顔に蹴りを入れると見せかけて、顎にやったんだ」
勝利の説明に瑛子は感心したように声をあげた。
「勝利、すごいね。さすがだね」
「いや、全然だよ。あの後出てきたリヴァウスって奴が……」
そう言って勝利は口を閉じた。瑛子はリヴァウスが現れて、意識を失い、別人のように変わっていた。瑛子はそのときのことは覚えていないと言った。
「……次は絶対守ってやるよ」
勝利は心に誓うように言葉に出した。瑛子がニコリと笑った。

瑛子の見舞いのあと、勝利は木山研究所に向かった。木山所長から話があると言われたのだ。
1階のドアを開けると、いろんな装置やパソコンが置いてあった。勝利はパソコンの中に進み、資料の山に埋もれていた南を見つけた。南は乱れた髪をかきあげた。
「勝利くん、所長が2階で待ってるわ。母『コア』について分かったのよ」
勝利は南の後ろに続いて2階に上がった。
「やぁ、よう来た」
木山所長は勝利に椅子をすすめた。南は給湯室に行き、3人分の熱いお茶と菓子を用意した。
「瑛子ちゃんはどうだった？」
木山所長はパリッとお茶菓子の煎餅を食べた。
「もうだいぶ、調子がいいみたいだった」
「そうか。あそこはわしの親友がやってる病院でな、腕は相当なも

のだからな」
「あと、瑛子が南さんに礼言ってました。ケーキをありがとうって」
南はにこりと笑った。
「さて、こっからが本題じゃ」
木山所長の顔が一瞬で研究者の顔になった。勝利は少し緊張して所長の言葉を待った。
「奴らの言っていた母『コア』は、奴らの生命の源じゃ」
「生命の源？」
勝利は首を傾げた。
「それはワルーモノと同じ波動を放ち、大昔の地球に存在していたらしい」
勝利はリヴァウスの言葉を思い出した。（リヴァウスは『取り返しに来た』って言ってたけど、昔から地球にそれがあったからなんだ）
「え、ちょっと待てよ」
勝利は首を傾げた。
「大昔の地球にあったってことは、昔の地球はワルーモノの星だったってこと？」
「……あくまで、あったらしい、という話じゃ」
木山所長はずずっと音を立ててお茶を飲んだ。南が勝利たちの間に入った。
「今までワルーモノたちは、どうして地球を狙うのか、理由なんてないと思っていたの。今までだって人間の言葉を話すワルーモノは出てこなかったからね」
確かにそうだ、と勝利は頷いた。
「それが今になって理由を話した。しかも勝利くんの話だと、今までのワルーモノとは違う奴らが現れた」
「あいつ四天王って言ってたんだ」
勝利はリヴァウスを目の前にした瞬間を思い出した。
ただそこにいるだけなのに、リヴァウスからはすごいプレッシャーを受けた。そんなこと、今まで戦った奴らの中で体験したことがな

かったのに。
「おそらく奴らの親玉がいるのじゃろ」
木山所長は飲み干した湯呑みを机に置いた。
「何らかの原因で親玉は表に出て来なかった。しかし今、高度な知識を持ったワルーモノが現れたということは、いよいよ最終決戦に……と、わしは考えるな」
勝利がごくんと喉を鳴らした。たらっと嫌な汗が流れた。
「最終決戦……」
「とにかく、奴らがそれを狙っていることは確かじゃ。絶対に渡してしまってはいかん」
「だったら、奴らより先に見つけておけば安心だろ？　だいたいでも場所は分かんないの？」
勝利の問いに木山所長は浮かない表情になった。南が所長に代わって話した。
「可能性としては、地球の地中深くの中心。ここは地球の核でもあるからね。一応、今までのワルーモノが現れた場所を、地球の地図に照らしてみたけど場所が特定出来ないの。バラバラに暴れてるみたいね」
木山所長の浮かない顔の原因は、場所を特定出来ないということだったみたいだ。所長は、必ず調べてやるからな、と席を外してしまった。
「じゃ、私もお仕事に戻ろうかな」
南がうんっと伸びをして、湯呑みを片付けた。勝利はお茶菓子を棚の中に収めた。
「瑛子ちゃんのことだけど……」
「え？」
ドアを開けて南が勝利のほうに振り返った。
「あまり気にしないほうがいいわ。瑛子ちゃんは、何があっても瑛子ちゃんだから」
「……はい」

勝利はにこっと笑った。南はそれを見ると安心したのか、ほっと胸をなで下ろした。南なりに心配していたのだろう。勝利は南にさよならを言って研究所を後にした。

## ＬＩＧＨＴ　３：四天王（前書き）

この回で四天王が全員登場します。名前が片仮名なので、読みにくいうえに、覚えにくい……かもです。覚えやすいように作ったつもりなのですが……心配です（；）

## LIGHT　3：四天王

そこはとても暗かった。
光など届かない、永遠の闇がその場所を包んでいた。

ここは地球から遠い星、ダーズ星。ワルーモノたちがいる星だ。ダーズ星は緑や青といった、鮮やかな色はなく黒一色の星だ。
この星の頂点に立つもの、それがワルーモノだ。ワルーモノには四天王と呼ばれる4人の高度な知識と力を持つ者がいる。その四天王の下にいるのが、地球で暴れまわる手下の奴らだ。

「ワルーモノ様……」
四天王4人の中で最も品があり、誰よりもワルーモノを慕う四天王リヴァウスが、暗闇のなかでポツリと口にした。ギラリと鱗の尻尾が鈍く光った。
「ここにいたのですか」
リヴァウスははっとして振り返った。
リヴァウスの後ろには、青白い肌の色をした四天王ルシガルがいた。ルシガルはワルーモノたちのなかでも、地球の人間に近い姿をしており、黒のマントをいつも身につけている。この星自体が暗闇だというのに、ルシガルは全身黒ずくめの格好なので、青白い肌がくっきりと見える。切れ長の目で、鼻筋が通っている。
「何しに来た？」
リヴァウスは少し不機嫌になった。ルシガルはくすくすと笑った。
「そんなに嫌な顔をしないでください。私達は同じ四天王の仲間ではありませんか」
ルシガルはすっと手を広げて見せた。

（何が仲間だ。私は信じない……）
リヴァウスはふんっと顔を横に振った。そしてルシガルの横を通り過ぎた。すると、パシッとルシガルがリヴァウスの腕を取った。
「！　何をするっ」
「今から四天王だけの会議を開きます。王の間にお越しください」
「離せっ」
リヴァウスはルシガルの腕を払った。ルシガルはにやりと笑い、その場から一瞬にして消えた。リヴァウスは、カッとなってしまったせいか、はぁはぁと肩で息をしていた。

王の間。
ここはダーズ星の頂点である、ワルーモノがいる部屋だ。
部屋はとても広いのだが、やはり暗い。一応の灯りは所々にあるのだが、あまり意味がない。その灯りは輝かしいものではなく、軽く息を吹きかけてしまえば、簡単に消えてしまう程の明るさだ。

リヴァウスが部屋の頑丈なドアを開けた。ぎぎぎ……と重たい音が、今歩いてきた冷たい廊下に響いた。
「ま、待ってたんぜ」
一番にリヴァウスに声をかけてきたのは、四天王アラキモデウスだ。とても大きな図体の持ち主で、立派な2つの角を生やしている。瞳は血のように赤く、鼻息が荒い。また、口からは鋭い牙が見え、いつもだらしなく唾液がこぼれている。
「私で最後か？」
「いや、まだアイツが来てねぇよ」
アラキモデウスとは違う声が部屋の柱の影から聞こえた。そこから出てきたのは、最後の四天王ベルゼだ。
ベルゼはひたひたと裸足で床を歩き、リヴァウスの隣に並んだ。姿

はルシガルと同様、地球の人間によく似ている。人間で言うならば、１４、５歳の少年のようだ。ただ、手足は苔のような深い緑色で、瞳はアラキモデウス同様、真紅に染まっている。両耳は尖っていて、耳たぶにはいくつもの装飾品があった。

「招集かけておいて、当の本人が遅刻？　バカらしい」
ベルゼはけっと唾を吐いた。リヴァウスは眉間にしわを寄せた。
「ベルゼ、ここは王の間だ。そのような態度は……」
「王の間？　王なんてどこにいるんだよ。バカらしい」
ベルゼの変わらない態度に、リヴァウスはベルゼの首根っこを掴んだ。
「四天王とはいえ、ワルーモノ様を侮辱する者は許せん！　私がワルーモノ様に代わり、貴様を闇に葬ってやる！」
リヴァウスが片手を頭上に上げたとき、
「喧嘩はみっともないですよ」
と、四天王ルシガルが現れた。一瞬体の動きを止めたリヴァウスの隙を見て、ベルゼはひょいっとリヴァウスの手から離れた。
「おー怖っ。そんなに怒るなよ、リヴァウスの姉ちゃんよ」
ベルゼはくっくっと笑った。リヴァウスはますます頭に来て、ベルゼを捕まえようとした。しかし、それをルシガルが制した。
「ここに呼んだのは、喧嘩をするためではありません」
「じゃ、じゃあ何のために、あつ、集まったんだ？」
どもり癖のアラキモデウスがルシガルに聞いた。いがみあっていたリヴァウス達は、しんっと黙ってルシガルの答えを待った。
「それは『地球の希望の光』のことです」
リヴァウスがぴくりと反応した。
ルシガルはこつこつと履いているブーツの音を響かせて、３人に背中を向けた。ルシガルはちょうど部屋の真ん中に立った。そして黒マントから、青白い肌の手のひらを床に向けた。すると、ルシガルの足元の床が割れ、地下から大きな水球が現れた。コポコポと水球

の中に気泡が溢れていた。その水の固まりを見て、四天王たちは一斉に膝をつき頭を下げた。
「我らが王、ワルーモノ様」
ルシガルがそう言葉にすると、水球の中の気泡が返事をするようにコポコポと音を立てた。

水球の中心に足を腕の中に折り畳んで浮いているのが、ワルーモノだ。今は眠りについていて、水の球に守られている。

「ワルーモノ様がお目覚めになるには、我らが母『コア』が必要だ」
ルシガルが3人に振り向いた。分かっている、とリヴァウスは強い口調で答えた。
「そ、そそ、そのためには、あ、あの光はじゃ、邪魔なんだ」
アラキモデウスが王を目の前にしているせいで、いつもよりどもっていた。そんなアラキモデウスを見て、ベルゼがけっと悪態をついた。
「リヴァウスから見て、その光はどのような者なのです？」
ルシガルがリヴァウスに聞いた。リヴァウスは勝利との出会いを思い出した。
「あんな小さな光、我らの邪魔にさえならん」
「そうですか。あなたがそう言うのなら、大したことはないのでしょう」
「で、で、でもよぉ」
大きな体の割に小心者のアラキモデウスは、不安の色を表に出した。
「ま、まん、万が一っていうのも、あ、あるんじゃないか？」
アラキモデウスの不安を悟ったベルゼが、アラキモデウスの膝をパチンと叩いた。
「おっまえ、図体デカイ割にぐちぐち言うなよ、バカらしい」
「まぁまぁ、落ち着いてください。アラキモデウスの言うことも分かります。どんなことがあっても、自分の力を甘く見てはいけませ

ん。全ては王ワルーモノ様のため。失敗は許されないのですから」
他に変わったことは？　と、ルシガルは目線をベルゼ達からリヴァウスに移した。リヴァウスはしばらく考え、はっとした声をあげた。
「あの娘……」
「娘？」
ルシガルがぴくりと眉を上げた。リヴァウスは瑛子のことを思い出していた。
（あの娘、どこかで見たことがあるような……）
「どうしたのです？」
「美味そうな娘がいたのか？」
ベルゼが卑しい笑みを浮かべた。リヴァウスはむっとして、
「何でもない。私からは以上だ」
と答えた。
「とにかく」
ルシガルは3人を見回した。
「母『コア』を見つけ、ワルーモノ様に捧げるのです。そうすれば、あの青い地球は我らの手に戻るでしょう」
ルシガル、リヴァウス、アラキモデウスはこくっと頷きあった。ベルゼだけは、バカらしい、と風のように王の間から姿を消した。

## LIGHT　4：瑛子

「任務終了」
勝利は高く上げた腕を下ろし、制服のネクタイを緩めた。先程まで、足元に倒れていたワルーモノが跡形もなく消えていった。

ピロロロッ、ピロロロッ……。
今まで緊迫していた空気を、勝利の携帯の呼び出しメロディーが破った。勝利は軍人に預けていたカバンを受け取り、中をあさった。必要最低限の荷物しか入っていないはずなのに、なかなか携帯が見つからない。
「あっれぇ、どこだ？」
カバンの中身全てを外に出して、やっとそれは見つかった。ピッと通話ボタンを押す。
「もしもし？」
『おー、わしじゃ』
電話の主は木山所長だった。
『もうワルーモノは倒したか？』
「まあな。ったく、朝っぱらからやめてほしいぜ。今から学校に行くなんてよぉ」
勝利は大きな溜め息をついた。電話の向こうから、くすくすと笑い声が聞こえた。木山所長に勝利がうんざりした様子が見えたのだろう。
「で、何の用？」
しゅるっと勝利はネクタイを外し、携帯を肩と右耳に挟み、ネクタイを結び直した。
『喜べ。瑛子ちゃんが今日退院するんじゃ』

勝利はネクタイを結ぶ手を止めた。木山所長はよっぽど嬉しいのか、報告してくれた声が弾んでいた。
『今日は早く帰って瑛子ちゃんに顔を見せてやりなさい』
「今から行くよ」
勝利はブレザーを羽織り、足を学校方面から研究所のほうへ向けた。
『おいおい、学校はどうするんじゃ？』
「そんなことより、瑛子だろ」
勝利は所長の返事も聞かずに電話を切ってしまった。そして足早にその場を去った。

「勝利っ」
病室に入ると、瑛子がいきなり勝利に抱きついた。勝利は驚いて一歩後ろに下がった。
「お前、大丈夫なのかよ」
「うん！　もうすっかり元気っ」
瑛子はガッツポーズを勝利に見せた。勝利はふっと笑うと、くしゃくしゃと瑛子の頭を触った。
「あら、今日は学校をサボるのかしら？」
瑛子の後ろから、笑っている南が見えた。その隣には木山所長が、こほんっと咳をしていた。
「まあ、今日は仕方がない……かのぉ」
「ふふ、今日も朝からお疲れ様」
勝利は瑛子から労いの言葉をもらった。ふぅと溜め息をついた勝利は、病室の椅子に腰掛けた。
「……疲れた？」
「あ、いや」
勝利の顔には明らかに疲れの色が見えていた。元気な瑛子も勝利を心配した。

勝利が疲れるのも無理はなかった。
リヴァウスが現れてから毎日、ワルーモノが地球に現れるようになったのだ。
「勝利、ちょっと」
木山所長が勝利に目で合図を送った。勝利は小さく頷き、所長と一緒に病室を出た。そんな2人を瑛子は心配そうな顔で見ていた。

勝利と木山所長は病院の1階に下りた。そこには患者の受付と、畳が敷かれている休憩所、長椅子がいくつも並べられているロビーがあった。ロビーの大きなテレビからは朝の地方番組が流れていた。
「座ろうか」
木山所長が長椅子の端に腰掛けた。勝利はその隣に座った。
「瑛子のこと？」
勝利の言葉に木山所長は少し驚き、静かに頷いた。
「よく分かったな」
「病室を抜けてまでする話って言えば、そうかなって」
病室には瑛子がいる。わざわざ部屋を出たのは、瑛子の耳に入れてはいけない話なんだろう。木山所長はこほんっと咳をした。
「実は瑛子ちゃんを診察した医者……わしの親友なんじゃが、そいつがちょっと気になることがある、とわしに教えてくれたんじゃ」
ごくっと勝利の喉が鳴いた。だんだんと心臓の鼓動が速くなっていく。木山所長は少し間をおいて、閉じた口を開けた。
「瑛子ちゃんがこの病院に運ばれた夜、譫言のように口にした言葉を聞いたそうなんじゃ。それが、『ワルーモノが目覚める、再び地球を手に入れるため』……これを何度も繰り返していたみたいじゃ」
「……そんな」
勝利の疲れた顔が、さらに疲れの色を強めた。

（瑛子は一体、どうしたっていうんだ？　何かワルーモノと関係があるのか？）
勝利が考え込んでいると、木山所長がぽんっと肩を叩いた。
「瑛子ちゃんから目を離さないほうがいい。これはわしの想像じゃが、瑛子ちゃんは母『コア』について何か知っているかもしれん」
「！　そんなことないっ。瑛子は普通の人間だ」
「確かにそうじゃ。……四天王に会うまでは、な」
木山所長の言葉に勝利は心を震わせた。所長の目は真剣すぎて、勝利はふっと目を伏せてしまった。
「……今の瑛子はいつもの瑛子だ。きっと、気を失って変になってただけなんだよ」
「じゃがな、リヴァウスとやらに遭ったとき、瑛子ちゃんはいつもの瑛子ちゃんじゃなかったのじゃろ？　しかもリヴァウスは瑛子ちゃんを知っているみたいだ……と、教えてくれたのは勝利じゃないか」
「何だよ……じっちゃんはそんなに、瑛子を敵にしたいのかよ」
重く冷たい勝利の言葉は、閑散としたロビーに響いた。木山所長ははっとして、違うんじゃ、と慌てて答えた。
「そうは言っておらん。敵味方ではなく、何らかの形で関わっているかもしれん……という仮定の話じゃ」
「そうは聞こえねぇよ」
勝利はキッと木山所長を睨むと、すっと席を立った。木山所長は勝利を呼び止めようとするが、勝利は一度も振り返らず、瑛子の病室に戻った。
「勝利……」
ぽつんと一人残された所長は、しばらく勝利の背中が消えた廊下の先を見つめていた。カチ、コチ……と、ロビーの時計の秒針が大きな音を立てていた。

## ＬＩＧＨＴ　５：若い瞳（前書き）

新キャラ登場です

## LIGHT　5：若い瞳

瑛子が退院して翌日の朝。
勝利は瑛子と学校に行くため、瑛子の家の前に立っていた。
「おはよ？」
瑛子の声が聞こえ、勝利は片手をあげた。瑛子はきょとんとした顔だ。どうして勝利がここにいるのか分からないようだ。こほん、と勝利は小さく咳をした。
「また何かあっちゃ大変だからな」
「心配してくれてるの？」
瑛子が笑いながら、勝利の腕に手を通した。勝利が、ひっつくな、と慌てて瑛子の手をはがそうとした。
「あー、そんなことするんだ。やっぱり私のことなんて好きじゃないんだ」
頬を膨らませ、瑛子は勝利よりも3歩前に出て歩きだした。
「何怒ってんだよ」
後ろから聞こえる勝利の声は、瑛子を振り向かせることが出来なかった。
どんどん前に進んでいく瑛子。勝利はその場に突っ立ったまま、瑛子の不機嫌な背中を見つめていた。

『瑛子ちゃんは何らかの形で関わっている』

木山所長の言葉が勝利の頭に響いた。
（そんなこと……そんなことない。瑛子は普通の人間だ）
「勝利？」
意識が飛んでいた勝利の頭が、自分の名前を呼ばれたことで、現実の世界に戻った。前を歩いていた瑛子が、いつの間にか勝利の顔を下からのぞき込んでいる。

「うわっ」
勝利の心臓が飛び跳ねた。と同時に、右足が一歩後ろに下がった。
そんな勝利の反応を見て、瑛子はますます不機嫌になってしまった。
「何さ、何さ。そんなに驚くことないじゃない？」
「ごめんって。ちょっと考えごとしてた」
「……お祖父様のこと？」
退院が決まったあの日。一旦、病室を出た勝利と木山所長が戻ってきたとき、勝利はとても難しい顔をしていた。一方、木山所長は悲しそうな雰囲気で肩を落としていた。そんな2人を見た瑛子は、とても心が痛んだ。
（勝利とお祖父様。何を話してたの？　2人とも何だかおかしいよ）
瑛子はそう思いながら退院の日を過ごした。
「じっちゃんはカンケーねぇよ」
ほら、行くぞ、と勝利はぽんっと瑛子の頭を叩いて止めていた足を動かした。

ぽかぽかと暖かい日差しが教室を照らす昼下がり。勝利のクラスは英語の授業を受けている。
勝利の席は一番後ろの窓側。そのためか、勝利は寝て授業を過ごすことが多かった。今も机に横顔をくっつけて、夢の中に入る体制だ。
「……ちくしょー」
授業が始まって数十分、そろそろ深い眠りに落ちようとしたとき。
勝利の体が危険信号を発した。
ワルーモノが現れたのだ。
勝利はふわぁっと大きな欠伸と、腕をいっぱいに伸ばした。
「木山君？」
英語科の先生が、授業中にも関わらず、大きな欠伸と伸びをやってのける勝利を見て、口をあんぐりと開けた。

「先生、俺お仕事に行ってきます」
ぱちっと先生と目が合った勝利はそう言って、さっさと授業道具をカバンに詰めて席を立った。まだ授業が始まったばかりだと言うのに、あまりにも堂々と帰り支度をする勝利を、新任の英語教師はただ黙って見送るしかなかった。
「ま、待ちなさい」
勝利がいよいよ教室を出るとき、やっと教師らしい言葉を放った新任教師。勝利は面倒臭そうに溜め息をついた。
「先生、知らないの？」
クラスの女子がからかうように笑った。それが合図のように、静かだったクラスがざわざわと騒がしくなった。ただ瑛子だけは後ろを振り返り、心配そうな顔で勝利を見ていた。
「何だよ」
勝利が瑛子のそばに寄った。瑛子の席は後ろの一列の廊下側だ。
「気を付けてね」
「大丈夫だって。ちょちょいのちょいって終わらせてくるから」
勝利は姿勢を低くして瑛子の額に軽く口付けた。
「じゃあな」
勝利は新任教師を見た。どうやらクラスメイトから説明を受けたようだ。勝利を止めるような態度には出なかった。
勝利は教室を後にして校庭に出た。カバンの紐を肩にかけ、その場にしゃがみ込んだ。全神経を足に集中させると、キラキラと光の玉が勝利の足に集まった。
「よしっ」
勢いを付けた勝利はぴょんと飛び上がり、ワルーモノのもとへと向かった。
勝利が現場に着いたとき、惜しくも戦況は不利なものだった。

日の丸の軍隊は手も足も出せない状態で、自分の身を守るので精一杯のようだ。
（一応、対ワルーモノ部隊なんだからさぁ。もうちょっと頑張ってくれよ）
勝利は肩を落としたが、すぐに戦う顔になり、軍隊の前線に向かった。

「どんな感じなの？」
前線で指揮を取っている軍隊長に、勝利は少しイライラしながら聞いた。隊長は初めて見る地球の救世主に敬礼をした。
「はっ！　実は今こちらが押されてまして……」
耳を隊長のほうへ向け、勝利の目はワルーモノを捕らえていた。
今回のワルーモノは今までよりも、一回りも二回りも小さい。しかし頭が２つに分かれていて、それぞれの口から炎が吐き出されていた。
「あの炎は、我が国の対ワルーモノ戦闘機の機体を、簡単に溶かしてしまう程の熱を持っています」
隊長が大きな声を上げて勝利に報告をした。
確かに、ワルーモノを囲んでいる各隊の攻撃は、全て吐き出される炎で溶けてしまい、ワルーモノに当たらない。ワルーモノは自身を守ると同時に、勝利達に攻撃もしているのだ。
「やっかいだねぇ」
勝利は腕を組み、かりっと右手の親指を噛んだ。これは勝利の、考えごとをするときの癖だ。その癖は木山家に受け継がれているようで、勝利の父親、勝貴も木山所長も、同じ癖を持っている。
（とりあえず、いつものように軍には下がってもらって……）
黙々と作戦を考えている勝利のそばで、先程の隊長のもとに、若い隊員が駆けつけていた。その隊員はじっと勝利を見ている。勝利もこの視線に気付き、何だよ？　と、あからさまに嫌な顔をした。
「貴様が地球の救世主だと？」

若い隊員は、隊長の止める声を振り切って、勝利のそばに寄ってきた。
「私たちを下げるつもりじゃないだろうな？」
隊員はぎろっと勝利を睨んだ。見た目からして、勝利と同い年のようだ。
「あんた、どういう教育してんの？」
勝利は無礼な隊員を指さしながら隊長に聞いた。
「申し訳ありません。こいつは最近入隊した者でして……梅山、謝れ！　頭を下げろ！」
隊長は若い隊員、梅山　太一を叱りつけた。しかし太一は怯むことなく、勝利を真正面から睨み続けた。その瞳は、強い正義感でキラキラと輝いていた。勝利はふぅと溜め息をつき、呆れた顔になった。
「あのさぁ、君はまだ入ったばかりで知らないだろうけど……」
「何が救世主だ、ただの目立ちたがりじゃないか」
太一は強い口調で言い放った。その態度に、簡単に済ませようとしていた勝利はかちんっと頭に来てしまった。ふつふつと何かが湧き上がる。
「俺が目立ちたがりだって？　そんな目立ちたがりに毎回、助けられてるのは誰なんだよ？」
勝利はぐっと太一の胸ぐらを掴み、馬鹿にするような目で太一を見下ろした。太一は、なおも怯まない。それどころか勝利と同じように、勝利の胸ぐらを掴みかかった。
「私は貴様を認めない」
「……はぁっ？」
勝利と太一がいがみ合っているとき、近くの隊がワルーモノの攻撃を受けてしまった。その爆発音を聞いて、勝利は太一から手を離した。
（くそっ。早く号令を出していればっ）
勝利はすっと目を閉じ念じた。
『これより各隊、この領域から離脱。あとは俺に任せろ』

勝利の声が、この戦闘区域にいる隊員全てに伝わった。
よし、と勝利は袖をまくってワルーモノに近づこうとしたとき、背後から太一の怒声が聞こえた。
「待てよ、冗談じゃない！　下がれだと？　俺たちはショーの前座じゃねぇ！」
「梅山っ！」
勝利の代わりに、太一直属の隊長が、太一の頬に握り拳を食らわせた。太一の口から血がたらっと流れた。
「我々は、領域から離脱する、という命令を受けた。それに従わないのなら、軍法会議にかけられ……」
「だって腹立つじゃないっすか！」
先程までは軍人として強い口調でいた太一も、隊長の言葉の前では心の叫びを思い浮かんだままに口にしていた。
「俺はこんなことをするために軍隊に入ったんじゃない。俺がワルーモノを倒さないと」
「……とりあえずさ」
若い瞳から涙を流した太一を見て、勝利はぽりっと頭をかいた。
ワルーモノの暴れようはどんどんヒートアップしていた。周りの木々をなぎ倒し、コンクリートの道路には亀裂が入り、高層ビルは傾いていた。いくら体が小さいからと言っても、人間と比べると何十倍も何百倍も大きい。
（そろそろ相手をしないとな……）
勝利は太一の肩を叩いた。
「後でお前のケンカ買うからさ。とりあえず、今は下がってくれ」
そう言い残して、勝利はぴょんっと高く飛んだ。
「ちょ、ちょっと」
太一の言葉はワルーモノの火炎放射の轟音でかき消されてしまった。

## ＬＩＧＨＴ　６：炎の檻（前書き）

あるケータイアプリゲームにはまってしまって、更新が遅くなりました（　　）

## LIGHT　6：炎の檻

（さてと、どうするかなぁ……）
勝利はワルーモノの前に立った。ワルーモノの４つの目が、勝利をじっ……と見つめていた。その目はどこか勝利をあざ笑っているようだ。ゆらっと、目の中の何かが揺れた。

そのときだった。

どこからともなく、ドスの利いた声が勝利に話しかけた。
『……オ前ガ地球ノ希望ノ光カ？』
「え？」
勝利は目だけを周りに移した。誰もいない。この場にいるのは、勝利と頭２つのワルーモノだけ。
（何だ？　幻聴？）
勝利は頭を振った。そして、ぱんっと自分の頬を叩いて気合いを入れた。
しかし、幻聴のはずである、あの声がまた聞こえた。
『美味ソウナ体ダナ……』
ゲテゲテと、ワルーモノは口から涎をたらしていた。勝利はじっと、ワルーモノの４つの目を見た。４つとも深緑で、それぞれに勝利の姿が映っていた。
「お前がしゃべってんのか？」
『驚イタカ？　ワルーモノハ　脳ミソノ無イ　　只ノ卑劣ナ侵略者ダト思ッテイタノカ？』
勝利から見て、ワルーモノの左の顔の口角がにんまりと上がった。
『ダガ違ウ　我々ハ只ノ侵略者ナドデハナイ　我々カラ見レバ　オ前達コソガ侵略者ナノダ』

右の顔がボッと炎を吐いた。それは人間が唾を吐き出す姿に似ていた。
「何、ワルーモノのくせにペラペラしゃべってんだ」
勝利はぐっと足に力を入れ地面を蹴った。すると勝利の体がふわっと宙に浮き、ワルーモノの顔の高さまで上がった。
「もうしゃべんな」
勝利は右足の蹴りを、ワルーモノの左の顔に食らわせようとした。しかし、ワルーモノの口から炎が吐き出され、勝利は寸前のところでそれを避けた。
「ちっ……」
『ナント小サキ光　　ソレデ地球ヲ守ルツモリカ？』
2つの顔が勝利をあざ笑った。そして勝利を囲むように、左右の口から炎を吐き出した。轟々と燃える音が世界を包み込んだ。勝利の目に赤一色の世界が映った。
「くそっ！」
勝利はもう一度飛ぼうと、腰を低くしたが、はっと考えた。
飛んだからと言って、またあの炎にやられてしまうのだ。勝利の力で炎を消す……というような魔法などない。炎にどう対応するべきか考えなくては……。
（まいったな……）
勝利を囲む炎の輪はちりちりと音を立てて、どんどん空気を燃やしていく。
大量の汗が勝利の体を濡らした。だんだん息が苦しくなっていく。
勝利はがくっと片膝を地面に付けた。
『モウ終ワリカ？』
左の顔がケケケと笑った。そして、ぐにゃりと首が伸び、顔を勝利の目の前にやった。
『ドウダ？　炎ノ中ニイル気分ハ？』
「べ、別に？」
勝利は息を切らしながらも、余裕ある笑みを浮かべた。

どんなに追い込まれても、敵に弱いところは見せない。
それが勝利のモットーだ。
『オ前ヲ倒セバ　コノ星ハ我ラノ手ニ戻ル　ワルーモノ様ノ世界ニ生マレ変ワルノダ』
右側の顔が炎を吹き出すと同時に、喜びの声を上げた。左側の顔もニタニタと笑い、勝利を見下ろしている。
（バカにしやがって……でも、早くなんとかしないと、マジでやばい……）
ぐらりと、勝利の目の前が歪んだ。酸素が無くなってきている証拠だ。
周りは炎と煙で充満している。空気を吸うと、炎の熱が勝利の喉を焼き、しかも煙も一緒に吸い込んでしまうので、じっとしているだけで勝利の体力が奪われていく。
（俺は倒れちゃいけねぇ）
ふらふらする頭に、ぐっと力を入れる。勝利は汗が目に入らないように、額を手で拭った。まるで大雨のように流れていた汗は、拭った指先からぽたぽたと滴り落ちている。
『楽ニナレ　小サキ光ヨ』
ワルーモノの嬉しそうな言葉に、勝利の手がぴくりと反応した。
「楽になる？」
『ソウダ　オ前1人デ守リキル事ナド不可能ダ』
勝利の背より、遥か高く燃え上がる炎の先にワルーモノの顔が見える。勝利は時々ふらつきながらも、目線だけはワルーモノから離さなかった。
（楽になる？　そんなこと……俺には出来ない）
勝利の心の中に、ぽつんと瑛子の姿が浮かんだ。瑛子はいつもの笑顔を勝利に見せていた。
（俺は決めたんだ。絶対守るって、決めたんだ）
「俺が1人だから守れない？」
ワルーモノはぴたりと体の動きを止め、炎の中にいる勝利を見た。

「ふざけんな。俺は1人でも守ってみせる。決めたんだ、絶対守るって」
片膝を地面から離し、勝利は自分の背よりも高く燃え上がる炎を目の前にして立ち上がった。
諦めない勝利の姿を見たワルーモノは、少し困惑した顔をした。
『マダ言ウカ　オ前1人デ何ガ出来ル？　ヨク周リヲ見ロ　今オ前ハ1人ダ』
「1人？　それは違うな！」
突然、炎の外側から勝利たち以外の声が聞こえた。勝利もワルーモノも突然の第3者の乱入に驚き、きょろきょろと辺りを見渡した。
「木山　勝利！　聞こえるかっ」
（この声……さっきの軍人か！）
勝利は炎の中から、声が聞こえた方に振り向いた。
そう、突然の声の主は梅山　太一なのだ。
勝利はすぐに、太一にこの場から離れるよう怒鳴った。しかし煙を吸い込んでしまったため、うまく言葉を口にすることが出来なかった。
太一の声が途切れることなく聞こえてくる。
「木山！　お前1人でかっこつけるなっ」
「なんだとぉ？」
ごほごほと咳き込み、勝利は叫んだ。
（危ないだろーが。さっさと逃げて……）
『何ダ　マタ小サキ光ガ現レタナ』
ワルーモノは4つの目を太一のほうに向けた。その目と合った瞬間、太一は頭から1本の長い釘を打ち付けられたような感覚に襲われた。
（何だ、この感じ。これがワルーモノ？）
太一はワルーモノから目が離せなかった。
目線を外してしまったら最期。太一が向こうの世界に飛ばされてしまう。
先程の威勢がどこに行ったのか、太一は何も言えずにただ、ワルー

モノを見ていた。
（静かだな）
勝利の耳に入ってくるのは、自分を囲んでいる炎の音とワルーモノがときどき鳴らす喉の音だけだった。ただ、太一は炎の外にいるのは分かった。ワルーモノがじっと、太一がいるであろう場所を見ている。その目は餌を見つけた獣のように、標的を見定めタイミングを待っているようだ。
「おい、お前！　自分の命が大切ならさっさと……」
「黙れっ」
太一の叫びに勝利は怯んだ。
「私は逃げてはいけない……逃げるわけにはいかない！」
「お前……」
勝利の目には太一の姿が映らなかったが、勝利の心には太一がはっきりと見えていた。ワルーモノを見ている太一の瞳。今の勝利と同じ瞳をしていた。
（ま、俺は震えてなんかいないけど）
ふっと口元で勝利は笑った。
（……よし。とりあえず、この炎から脱出だな）
ワルーモノは幸いに太一に気を取られているようだ。始めは目だけを向けていたが、今は体ごと太一を見ている。
あいつ意外と役に立つな……と、勝利はくっくっと笑った。そして、ぐっと足に力を入れ軽く地面を蹴った。ぴょんっと飛んだ勝利の体は、一瞬で炎の高さを飛び越えた。
「お前無茶するなぁ」
太一とワルーモノの間に着地を決めた勝利。ワルーモノの目に勝利の姿が映ったとき、左側の顔が炎のほうを向いた。
『イツノ間ニ……』
「あんたが目ぇ離した隙に。あれくらい飛ぶのは、俺にとって楽勝なわけ。ただ、あんたがいたから飛べなかったんだよね」
勝利はにこりと笑い、後ろにいる太一に話しかけた。

「えっと、梅干しだっけ？」
「梅山だっ」
「ふんっ。それだけ元気があるなら大丈夫だな」
勝利の肩が細かく震えた。どうやら笑っているようだ。
「お前は後ろに下がってな」
「！！　私は下がらないっ」
カッとなった太一は勝利の左肩を掴んだ。勝利は振り向きもせずに諭すように続けた。
「生身のお前に直接ワルーモノと戦わせねぇよ。地球の救世主としてな」
「……っ」
それでも、なかなか下がらない太一に対して勝利は、疾風の速さで太一の後ろに回り込み、太一の首根っこを掴みぽいっと後ろに投げた。
「よっしゃ、もう速攻でやっつけてやるよ」
勝利はぐっと腰を落として戦闘態勢に入った。ワルーモノはじっと勝利の様子を伺っていた。

2人の沈黙を破ったのはワルーモノだった。

ワルーモノは得意の炎を両方の口から吐いた。ごうっと勢いよく吐き出した炎は、とぐろを巻いて勝利に向かってきた。勝利はカッと地面を蹴ってそれを右に避けた。そしてそのまま一直線にワルーモノ目掛けて走り出した。
『フンッ』
向かってくる勝利に対して、ワルーモノは息を吸い込み、また炎を吐き出した。それを勝利は左右に避けながらも、足を止めなかった。勝利が攻撃を避ける度に、ひゅんひゅんっと空気が切れる音が聞こえた。
（コイツ……速クナッテイル！？）

ワルーモノの４つの目が光った。
ワルーモノが気付いたとおり、勝利の足のスピードがだんだんと速くなっているのだ。攻撃をする間を与えない勝利は、いつの間にか、ワルーモノの足下にいた。
「あれ？　ちょっと速すぎたかな？」
『オノレ　チョロチョロト……』
ワルーモノはごぉっと、大きく息を吸った。それは、地球上の酸素を全て吸い込んでしまうような大きな音だった。勝利は飛ばされないように、ワルーモノの足にしがみついた。
（次、大きいな……よし、次で終わらせるっ）
吸い込みが終わったのか、ぴたりと吸い込まれていく酸素の音が止まった。ワルーモノを見ると、ぱんぱんに腹が膨れ上がり、ほっそりとしていた長い首や、顔の頬までも、空気が詰まっているようだ。ちょんっとつついただけで、破裂してしまいそうだ。
『ド　ドウダ　コレダケ吸イ込ミ炎トナレバ　イクラ逃ゲ足ガ速クトモ逃ゲラレマイ』
ワルーモノは得意気ににやりとした。しかし、口を動かすのが辛いのか、ワルーモノの言葉の節々に苦しそうな感じがした。
勝利は思わず吹き出してしまった。勝利の立っている場所から、ワルーモノの顔は見えない。膨れ上がった腹の下だけが勝利の目に映っている。だから、苦しそうなワルーモノの表情が分からないのだが、あんなに偉そうに話していた敵が自分で腹を膨らませ、その結果苦しそうな声になったのを考えると、可笑しくてたまらなくなったのだ。
『ナ　何ガオカシイ！』
ワルーモノはにゅっと首を伸ばした。ぱんぱんに膨れた顔を間近で見せられ、勝利は耐えられなかった。腹を抱えて勝利はその場に崩れた。
「やっべぇ。お前やべぇよ。その格好で地球を支配するだって？　マジ笑えるんですけど」

大きな風船になったワルーモノは伸ばした首を元に戻した。勝利はまだ大声で笑っている。
『貴様！　笑ッテイラレルノモ今ダケダッ』
ワルーモノは背中を後ろに反った。破裂しそうな腹が空を仰いだ。
（かかったな……）
勝利はぺろっと舌を出した。
そう。わざと、ワルーモノの腹を空気でいっぱいにして、それをからかうことで怒らせたのは、勝利の作戦だったのだ。
（頭は2つあるけど脳みそは無いみたいだな）
勝利はワルーモノを見上げた。大きな腹には既に、ぱんぱんに空気が入っているにもかかわらず、また空気を吸い込んでいる。少しずつだが、むくむくと腹が大きくなっていく。
底なし沼……じゃなくて底なし腹だ、と勝利は呆れた。
しばらくして、ぐんぐん大きくなったワルーモノの体の動きが止まった。
『次デ最期ダ！』
ワルーモノは勢いよく右足を前に踏み込み、反らしていた背中を前に倒した。と同時に2つの口から、今までとは比べものにならないくらいの、空を焼き尽くすような真っ赤な炎が勝利目掛けて走った。
勝利はぐっと足に全神経を集中させた。どこからともなく、小さな光が両足に集まり、ワルーモノの炎の赤色に対抗するように真っ白に光った。カッと地面を蹴ると、素早い動きで炎を交わした。しかし、ワルーモノの攻撃はミサイルのように勝利を追いかけた。それに当たらないように勝利は走った。とにかく走った。
しかし、ワルーモノの攻撃は止まらない。腹いっぱいに溜め込んだ空気が炎となって勝利を追いかけ回すのだ。
（どんだけ空気を吸ってたんだよっ）
この異常な炎は勝利の計算違いだった。
しかし、この戦いにようやく終わりが近づいていた。
炎を吐ききったワルーモノは高らかに笑った。

『アノ威勢ハドコニ消エタ？　オ前ハマタ　我ラノ炎ニ囲マレテイルデハナイカ！』
ワルーモノの目の前に、自分で撒き散らした炎があった。その色はとても赤く、この世の全ての赤が吸い取られたようだ。チリチリ……と、空気が燃える音がところどころから聞こえた。
「そうかな？　よく周りを見てみなよ」
勝利はにやりと口の端を上げた。ワルーモノはぎょろぎょろと目を回して辺りを見たが、勝利が炎に囲まれているのを確認してまた笑った。
『ソノヨウナ脅シナド　我ラニハ効カン　貴様コソ周リヲヨク見ルンダナ　炎ニ囲マレテ……』
堂々としていたワルーモノの態度が、だんだんと変わっていった。それと同じように、ワルーモノの目に現実が鮮明に映りだした。
「どうなってるんだ……？」
勝利に投げられた太一がワルーモノの姿を見て呟いた。太一に気がついた勝利はふっと涼しい顔をした。
「さっきまでは、こちら側が劣勢だった。なのにいつの間にか……」
『ウオォォォォッ』
ワルーモノは空に向かって鳴き叫んだ。勝利を炎の中に閉じ込めたつもりが、いつの間にか自分が炎の檻の中にいたのだ。
勝利はただ、攻撃を避けるために走っていたわけではなかった。ワルーモノの周りを走ることで、ミサイルのように追いかけてきた炎でワルーモノを囲んだのだ。
『小サキ光ヨォ　許サン　許サンゾォッ』
赤色に染まっていくワルーモノはぎろりと勝利を睨んだ。ワルーモノの皮膚が、灼熱の炎に焼かれて溶けだしていた。どうやら体内とは、体の造りが違うようだ。皮膚はどろどろになり、そこから鼻が曲がるほどの異臭が放たれた。
『オ　オ前ノヨウナ光ガ存在シタトコロデ……　ワルーモノ様ノ世界ニハ変ワリナイ』

ワルーモノの体が半分ほど溶け、炎も次第に小さくなった。溶けた体液の山の先に、２つの顔と鋭い爪を持った片腕があった。しかしそれらも次第に形を失い、最期は１つの顔が残った。勝利はゆっくりとそれに近づいた。
「おい、危ない！」
太一が止めようとしたが、勝利は振り返らなかった。
「とどめを刺す……」
きらきらと、足に集まっていた光が勝利の左腕に集まった。
「じゃあな」
勝利の左手の握り拳が天に突き上げられた。
『……コレデ我ラガ黙ルト思ウカ？』
もう両目も溶けたワルーモノの顔が勝利を見た。口だけが動いている。
『次ハオ前ノ番ダ』
「いちいち、うるせぇんだよ」
より一層、白く輝く左の拳が横に細かく震えた。そして天高く突き上げられた拳は、すっと光の直線を上から下に描いた。ワルーモノの溶けた体が飛び散り、その一部が勝利の頬に付いた。
『……四天王……』
「！」
勝利はワルーモノの体にぶち込んだ拳を抜いた。どろどろだったワルーモノは光に包まれて、ぽんっと弾くように消えた。
「すごい……っ」
その様子を見ていた太一は勝利の元に駆け寄った。
「お前、本当に地球の希望の光だったんだな！　あんな巨大なワルーモノを一瞬で消した……すごいっ」
太一は興奮していた。
生まれて初めて、ワルーモノを目の前にして、生まれて初めて、地球の希望の光を見た。
太一の頬は紅潮し、目がらんらんとしていた。しかし勝利は厳しい

顔つきだ。
『四天王……リヴァウス様……』
ワルーモノの最期の一言が勝利の心に響いた。

## ＬＩＧＨＴ　７：ダース星にて（前書き）

この話から、書き方が若干変わります。（段落で一マス空ける…など）
今まで読みにくかったと思いますが、これで少しは見やすくなった…かな？
ごめんなさい、自信ないです（＿＿；）

## LIGHT　7：ダース星にて

ーーダース星、王の間。
「またか」
四天王リヴァウスの冷たい声が、相変わらずの薄暗いこの部屋に溶けて消えた。

先程までリヴァウスは、地球の様子を王の間にある水鏡を通して見ていた。リヴァウスが放った、２つの頭のワルーモノは勝利によって消されてしまったところだ。
（私の血を浴びせただけでは、無理だったのか）
ふと自分の腕を見た。すっ……と、横一文字に鋭い刃物で切ったような痕があった。じっとその場所を見ていると、じわじわと忘れていた痛みが体を巡った。
（ワルーモノ様……）
「こんなところで何をしているのです？」
はっとしたリヴァウスは腕の傷から目を離した。王の間に入ってきた人物は、コツコツと足音を立てて近づいてきた。時折、身に纏っているマントを翻す音が聞こえた。
「隠さなくてもいいじゃないですか」
ルシガルがひょっこりと頭を出した。相変わらず、青白い顔をしている。リヴァウスはあからさまに嫌な顔になった。
「お前こそ、何しに来た？」
「あなたと同じですよ」
ルシガルは静かに笑って、リヴァウスの後ろに隠れている水鏡を指差した。そして、リヴァウスの横を通り鏡の前に立った。
「また、やられましたね？」
ルシガルはにやりとしてリヴァウスを見た。その視線が、リヴァ

ウスの腕の傷がある場所で止まった。
「今回はあなたの血も混ざっていたというのに。大変残念なことです」
「ふんっ。次は完璧なワルーモノを作って小さき光を消してみせる」
リヴァウスはきっとルシガルを睨みつけた。
「ご自分の体に傷を付けるくらい、地球侵略にご熱心なのですね」
ルシガルのこの発言に、リヴァウスは唖然とした表情になり、だんだんと眉間にしわを寄せていった。
「地球侵略だと？　地球を我らの手に戻し、再びワルーモノ様の世界に戻す。それが我らの目的。侵略など卑劣なものと同じにするな」
リヴァウスがぐっとルシガルの胸元を掴んだ。掴まれたルシガルは怯みもしないで高い声で笑った。やや吊り目の瞳がきらりと光った。そんな態度がますますリヴァウスの怒りに触れた。
「何がおかしい！」
「ははっ。そんなに怒らないでください。少し言葉を間違えただけのこと。しかし、あなたを不快にさせたのは謝ります」
しぶしぶリヴァウスは掴んでいた手を離した。ルシガルはぴっと、マントのしわを直した。
「私をバカにするのは我慢できる。が、ワルーモノ様を侮辱する者は誰であっても許さない」
リヴァウスはもう一度、きっと深緑の瞳に力を込めた。それに怯むことなくルシガルは、相変わらずの読めない笑みを浮かべた。
（ルシガル。貴様は一体何を考えている？）
「リ、リヴァウス。今度は、オ、オレにやらせろぉ」
またこの王の間に四天王がやってきた。大きな体を持つ四天王アラキモデウスだ。今日もだらしなく涎を垂らしている。
「アラキモデウス、お前に作れるのか？」
リヴァウスは疑うような口調でアラキモデウスを問いただした。
地球にやってくるワルーモノは、この四天王が作り出したもの、いわば分身のようなものだ。このような力が使えるのは四天王とダ

ース星の主、ワルーモノだけだ。四天王もまた、親玉ワルーモノから作り出された存在なのである。
「オ、オレは作れないけど、オレは強いっ」
アラキモデウスがぶんっと太い腕をリヴァウスに見せつけた。
（確かに力はこの四天王の中で一番強いが……）
リヴァウスは口元に手をやって考えた。すると隣に立っていたルシガルが、
「頭脳派のあなたが失敗した……ならば、次は力重視のアラキモデウスが地球に降りるのはいい作戦だと思いますね」
と、口を出した。アラキモデウスはにたにたと笑い、嬉しそうに手足をばたつかせた。どしんっどしんっと、床が抜けるような音が広間いっぱいに響いた。
「分かった、分かったからアラキモデウス、暴れるのはやめなさいっ」
リヴァウスが声を荒げた。するとアラキモデウスは、はっと我に返り手足の動きを止めた。
「じゃ、じゃ、オ、オレ、行ってくる」
アラキモデウスが王の間を後にした。
「……どうなると思いますか？」
ルシガルが、アラキモデウスが出ていったのを確認してリヴァウスに聞いた。
「……知らん」
リヴァウスはそう答えて王の間を後にした。
一人残ったルシガルはくっくっと笑いを噛みしめた。
「リヴァウスは負けず嫌いなのですね」

## LIGHT　8：四天王アラキモデウス（1）

2月某日。
勝利と瑛子は学校の屋上でお昼の時間を過ごしていた。
「……さみぃ」
勝利が体を縮めて呟いた。隣りに座っている瑛子は何食わぬ顔で、空になった弁当箱を片付けた。
「何でこの寒い時期に屋上なんかで食べるかなぁ？」
「あたしがここを好きだから。嫌なら断ればよかったじゃない？」
瑛子が口を尖らせた。
屋上の床はコンクリートでひんやりとしている。空気も冷たく、風がないのが不幸中の幸いだ。勝利は寒いのが大の苦手なのだ。
「ヒーローが寒いのが苦手って、何だか笑っちゃう」
「うっせぇよ。ヒーローって言っても、俺も普通の人間なんだよ」
そうだね、と瑛子はにこりと笑った。勝利はぴったりと瑛子に寄り添い、頭を瑛子の肩に乗せた。勝利の貴重で大切な、一時の安らぎだ。
しかし、そんな安らぎの時間が終わってしまうことに勝利は気が付いた。ふいに立ち上がった勝利を瑛子は見上げた。
「お仕事？」
「そうみたいだな……」
勝利は制服のズボンに付いた埃を払った。瑛子も立ち上がり、勝利の隣りに並んだ。
「気をつけてね」
「おぅ」
そう答えた勝利は、瑛子の額にキスを落とすと、あっという間に白い光に包まれて姿を消した。
「勝利……気をつけてね」
（何だろう、嫌な予感がする……）

瑛子はぎゅっと、両手を胸の前で組んだ。

（ワルーモノの気が強い……ここらへんかな）

勝利はゆっくりと空から地面に足を着けた。辺りは見通しが良く、緑に囲まれた広場のようだ。ここなら、どこにワルーモノが現れても容易に見つけることが出来る。勝利は周囲に目を配った。

――あれ以来。瑛子が倒れて無事に退院した日以来、勝利は木山所長と顔を合わせていない。毎月のメンテナンスのために、研究所を訪ねることはあったが、木山所長も顔が合わせずらいらしく、勝利がやって来ると奥の部屋に隠れてしまう。

（じっちゃんの言ってること、本当は分かるんだ。でも俺は瑛子を守りたいから……）

勝利は神経を集中させたまま、瑛子と木山所長のことを考えた。

木山所長は、瑛子とワルーモノは何らかの繋がりがある……と考えている。それは初めて言葉を話すワルーモノ、四天王リヴァウスが現れたのがきっかけだった。

リヴァウスを目の前にした瑛子は一時的だが、人が変わった。最初は生まれ初めてワルーモノを見たショックだと思っていたが、検査のために入院した病室でこのような言葉を呟いていたという。

――ワルーモノが再び地球を手に入れる――

勝利もあのときの瑛子の異変には驚いた。けれど、退院してからの瑛子の調子は順調で、何も心配することはなかった。

（そうだ、やっぱりワルーモノに近付きすぎたせいなんだ。俺がしっかり瑛子を守っていれば何の問題もないんだ）

勝利は邪念を振り払うように頭を横に振った。

それにしても、ワルーモノが一向に現れる気配がない。ただワル

ーモノが発する気は感じている。勝利はしばらくじっと動かずにいたが、何かに気が付きはっとした。
「軍がいない……？」
そうなのだ。いつも真っ先に駆け付けているはずの日の丸軍隊がいない。
その理由に、このワルーモノの気配に気が付かない、ということは当てはまらない。何故なら、木山研究所がワルーモノが発する電波を感知し、軍隊の本部に知らせが入るようになっているからだ。だから、軍が気が付かないということはない。だとしたら、木山研究所が？
（じっちゃんに限ってそんなこと……。こんなに大きな電波なんだ、気が付かないわけがない）
だとしたら何なんだ？　ワルーモノはどこにいる？
勝利の神経にさらに緊張が走った。もしかしたら、すでにワルーモノは近くにいて、こちらの出方を窺っているのかもしれない。
用心に越したことはないと、勝利は無闇に動くことをやめた。その場でじっとしていれば、そのうち向こうから姿を現すだろう。
この勝利の考えが的中した。しばらくしてゆらりと周りの風景が歪み、だんだんと真っ暗な世界に変わっていった。
「結構、頭がいいみたいじゃねぇの？」
勝利の前方から声が聞こえた。いやにねちねちした声だ。勝利は眉をひそめた。
「お前は？」
「俺の名前は四天王ベルガ」
（四天王だって？）
勝利の額に冷や汗が流れた。当たりたくなかった敵に当たってしまったようだ。次第に暗闇に目が慣れ、勝利の両目が四天王ベルガの姿を捕らえることが出来た。
人間の姿によく似ている。歳は１４、５歳といったところか。ただ手足など細かい部分は人間に似ても似つかない。岩のようにごつ

ごつしているように見える。ときどき、ベルガの両耳に付けられている金属の装飾品がカチンと音を響かせた。
「ふぅん。あんたがリヴァウスの子どもを倒したって？　そうには見えねぇなぁ」
「子ども？　どういう意味だ？」
「お前、何も知らないでオレ達と戦ってたわけ？　バカらしい」
ベルゼはくっくと笑った。
「リヴァウスの次はお前が相手ってわけか」
勝利はぐっと腰を落としてベルゼを真正面から睨んだ。ベルゼは大きな赤い瞳を細くして、
「残念だけど今回はオレじゃねぇ。今のお前がオレの相手をするなんてバカらしい。……おい、そろそろ出て来いよ」
と、くいっと後ろを振り返った。するとベルゼの背後から、激しい鼻息の音が聞こえた。何かがいるようだ。それも、とても大きな何かがいる。
（この感じ……もしかして新しい四天王か？）
だらだらと勝利の額には大量の汗が流れた。まさか同時に、二人の四天王に遭遇するなんて……。勝利はぎゅっと構えた拳に力を入れた。
「お、お前が、地球の光かぁぁ……」
ふごぉぉっと荒い鼻息の音を引き連れて現れたのは、勝利が想像していたよりも遥かに大きなワルーモノだった。
（な、なんだこいつ。有り得ない、こんなでかいワルーモノは初めてだ）
「驚いたか。お前がこれから相手をするのはこいつ、アラキモデウスだ」
ベルゼはそう言うと高く飛び上がり、四天王アラキモデウスの肩にちょこんと座った。
「アラキモデウス、ここでなら思い切り暴れられる。お前みたいな図体のでかい奴が地球に降りただけでぶっこわれちまうからな」

「そ、そ、そうなのか？　ここでなら大丈夫なのか？」
独特な声をしたアラキモデウスは、大きな口から涎を垂らしながら笑った。その表情は目を背けたくなるぐらい、卑しく下品なものだった。
アラキモデウスは見た目からしても、知性が全く感じられない。巨大な体に立派な角を持ちながら、どこか気弱な感じが受け取れた。それはきっと奴のどもり癖のせいだろう。
「よ、よぉし。オレがお、お前を倒して、ワルーモノ様に、ほ、褒めてもらうぞぉ」
アラキモデウスは両手を高らかに上げて、天に向かって吠えた。その尋常じゃない声に勝利は思わず耳に手をやった。その鳴き声は世界が壊れてしまうほどの声量で勝利は唖然とした。ベルゼの言うとおり、アラキモデウスが地球に降り立っただけで、地球にひびが入り簡単に壊れてしまいそうだ。
（……勝てるか？）
勝利はアラキモデウスを仰ぎ見た。とてもじゃないが、簡単に勝負がつきそうな感じではない。今までのワルーモノとは強さの次元が違う。
（けど俺がやらなくて誰が瑛子を守る？）
勝利の瞼の裏に瑛子の笑顔が見えた。とても暖かで、とても愛しい。……そうだ、俺は瑛子を守ると決めたんだ。勝利はぱんっと頬を叩いて気合いを入れた。
「アラキモだか何だか知んないけど、地球を狙う奴は俺が許さねぇ」
「ぐふっ。ち、小さなお前に、何が出来るのかなぁ？」
アラキモデウスが肩を上下に動かして笑った。
「小さな光、バカらしいけどお前らの言葉で言うと、今日がお前の命日ってやつだな」
アラキモデウスの肩に座っていたベルゼはそう言い残すと、すぅっと奴の体が周囲に解けて消えた。
「じゃ、じゃあ、さっそくやるぞ」

アラキモデウスがぐっと両腕に力を入れて構えた。
――こうして四天王アラキモデウスとの激しい戦いが始まった。

## ＬＩＧＨＴ　９：四天王アラキモデウス（２）（前書き）

少しグロテスクな表現があります。ご了承ください。

## ＬＩＧＨＴ　９：四天王アラキモデウス（２）

アラキモデウスが息をする度に、ふごぉぉぉという風の音が聞こえた。
勝利の周りは何もない闇の世界が広がっている。真っ黒な夜空に月だけが輝くように、ぽっかりとアラキモデウスと勝利だけが浮いていた。
（考えたって仕方がないな。やってみるしかない）
勝利は軽く地面を蹴ると疾風のような速さでアラキモデウスに向かった。
「は、ははは速いなぁっ」
アラキモデウスは予想以上の勝利の素早さに舌を巻いた。しかし持っていた棍棒を勝利めがけて降り下ろした。勝利はそれを寸前のところで見極め避けたが、その棍棒の威力に目を見開いた。あまりにも力が違いすぎるのだ。
（なんだよ、あの音。これが四天王の力ってやつか？）
勝利は足を止めてアラキモデウスを改めて見た。
棍棒が降り下ろされたとき、ものすごい爆風が勝利の体を襲った。それからも分かるように、あの棍棒は恐ろしく重たいのだろう。あれにかすっただけで、勝利の命の炎が消えてしまいそうだ。それはつまり、地球の炎も消えてしまうと言うことだ。
「ぐふっ。あ、当たらねぇなぁ。さ、ささすが、地球の光」
「敵に褒められても嬉しくねぇな」
アラキモデウスは下ろした棍棒を肩に担いだ。その姿は似合いすぎて笑ってしまいそうなほど、アラキモデウスに棍棒はよく似合う。
（だいたい、力任せな奴は足が鈍いって言うのがセオリーだよな）
勝利はじっとアラキモデウスの足下を見た。とても大きく大地を鷲掴みにできるほどだ。立派な爪があるが、黄ばんでいて汚ならしい。鋭さはあまりないようだ。所々、欠けているところがある。と

てもじゃないが、足が速そうには見えない。
（この勝負は速さが決め手だな）
よしっと気合いを入れた勝利は、足の神経に意識を集中させた。
すると、ほわんっと暖かい光が現れ、勝利の足が光り輝いた。
「ま、まぶ、眩しい……。そ、それがお前の光……」
アラキモデウスは一瞬、両目を閉じてしまった。それを見逃さなかった勝利は、ひゅんっと空気を裂いてアラキモデウスに向かって走り出し、力を込めた一撃をアラキモデウスの下腹部に食らわせた。
「ぐぅぅぅ……！」
痛々しいアラキモデウスの鳴き声が聞こえた。
（よしっ！　まずは一撃）
勝利は勢いに乗って、ぴょんっとアラキモデウスの目線の高さまで飛び上がった。そしてもう一撃食らわせようとしたとき、あの巨大な棍棒が勝利の頭上に現れたのだ。空中に一瞬だけ浮いている状態の勝利には避けることが出来ない。
「くそっ！」
勝利はとっさの判断で、アラキモデウスに向けた右足を押し寄せる棍棒に向かって蹴りを入れた。これで少しでも棍棒が落ちて来る軌道を外そうとしたのだ。
棍棒は勝利の一撃で跳ね返され、その反動でアラキモデウスが半歩後ろに下がった。どうやら直撃は免れたようだ。しかし事態は良くならなかった。
「ぐっ……あ、あぁぁぁぁっ！」
勝利の右足が膝から下が有り得ない方向に向かって折り曲がっていたのだ。骨が完璧に折れてしまっている。また、裂けた皮膚から白っぽいものが顔を覗かせていた。
「ぐぅ……くそぉっ」
ぼろぼろの勝利を見てアラキモデウスの顔が緩んだ。
「ぐっははは！　や、やはり小さき光！　わ、わわ我らの足下にも、お、およ、及ばないぃぃ！」

アラキモデウスはだらだらと涎を零しながら勝利を見下ろした。勝利は仰向けになって倒れていた。どくどくと勝利の真っ赤な血が流れている。

（あぁ、やばい。俺、踏みつぶされるな）

勝利は朦朧とする意識の中、くっと足に力を入れようとしたが入らない。どうやら神経に傷がついてしまっていて、脳からの信号が届かないようだ。さっきまで足に集まっていた光も、棍棒を蹴った瞬間に消えてしまった。

（地球も死ぬことを受け入れたのか……？）

何度も腕に意識を集中させても、勝利に力を与えてくれた光は集まらなかった。

あの光は地球の輝きだ。

人間にとって、母なる大地である地球の輝きを借りて、勝利はワルーモノを倒してきたのだ。

（お前が諦めたのなら、俺はどうすることも出来ない）

勝利の目には真っ暗な世界と卑しいアラキモデウスが映った。

（……最期ってのは案外、あっけないもんだな。最期ぐらい、綺麗な世界が見たかったな）

アラキモデウスの大きなごつごつしている足の裏が、勝利に向かってゆっくりと落ちてきた。実際ならもっと速度は速いのだが、死を受け入れようとしている勝利には、スローモーションになって見えた。

綺麗な世界。

当然、勝利は瑛子がいる世界を思い浮かべた。

瑛子がいるだけで、勝利の荒れた心は癒された。誰よりも自分を愛してくれるのは瑛子だと、勝利は静かにそう思っていた。だから、何者からも瑛子を守りたいと思った。自分が負けるはずがない、自分以外に瑛子を守れる奴はいないと信じてきた。

だが、今はどうだろう？
この上がらない体で何が出来る？　この二度と立ち上がらない脚で何が出来る？　この挫いた心で何が出来る？
（信じられないな、俺がこんなに簡単にやられるなんて）
俺が守るって決めたのにな。人間達を、地球を、何よりも瑛子を！
すっと勝利の頬に涙が流れた。気付けば両目に涙が溜まり、視界が歪んだ。それと同時に意識の中の瑛子の顔も歪んだ。
――あぁ、消えないでくれ！　消えないでくれ、瑛子……。俺を一人にしないでくれ！
勝利は無我夢中で腕をあげて瑛子を抱き締めようとした。しかし両手は空しく瑛子に触れることは出来なかった。
――あぁ、ごめん、ごめんなさい。
――俺、何も出来なかった。俺、地球を、瑛子を守ることが出来なかった。ごめんなさい、ごめんなさい……。
「瑛子……」
勝利の小さな小さな声が暗闇に解けた瞬間、ぐしゃっと肉を踏みつぶしたような音が響いた。
「ぐっへへへ。ち、小さな光、潰れた」

## LIGHT　10：光

「……勝利？」
瑛子は勝利に呼び掛けられたと思い、後ろを振り返った。しかし当然、そこには勝利の姿はない。家と学校を結ぶ道が続いているだけだ。
（確かに聞こえたのに……）
瑛子はしばらく振り向いた道の先を見ていたが、思い直して家へと続く道に視線を移した。
今日のお昼。勝利がワルーモノと戦うために学校を後にしてから、瑛子は何とも言えない不安を感じていた。胸の奥が、ぎゅぅっと締め上げられるような苦しい痛みがあった。
（この痛み、ちょっと前にも感じたことがある……）
いつだったかしら、と瑛子は首をひねった。瑛子の記憶の扉がぱたぱたと音を立てて開かれていく。
（そうよ、確か遊園地でワルーモノが現れたときだった……）
そこまで思い出したとき、瑛子の心臓が一拍だけ、どくんっと大きな音を立てた。瑛子は思わず、地面に膝をつき、胸の辺りに手をやった。
（何これ……また、この痛み。苦しいっ）
だんだんと瑛子の息が荒くなった。息がうまく出来ないのだ。
（あたし、どうしちゃったんだろう。痛い、苦しい……苦しいよ、勝利っ！）
――ショウリ……地球ノ希望ノ光　小サキ光――
どこから聞こえたのだろうか。優しい女性の声が確かに聞こえた。はっとした瑛子は辺りを見回した。しかし瑛子以外、誰もいない。

――光ガ消エル――

また聞こえた。瑛子はそっとその声に耳を傾けた。不思議とその声を聞くと、先程まで感じていた痛みが和らいでいった。

「消える？」

（光が消える……それって勝利が危ないってこと？）

せっかく痛みが消えたというのに、今度は恐ろしくなってしまった。瑛子は顔を青くしてその場に立ちすくんだ。

（勝利が危ない……どうしよう、どうすれば……！）

「ねぇっ！　あたしの声、聞こえる！？」

瑛子は誰も見えない空に向かって声を張り上げた。誰もいないはずなのに、瑛子には目の前に誰かがいる気配がした。

「勝利がいる場所を教えて！　光が消えるってことは、勝利が危ないってことなんでしょ？」

――ショウリ　地球ノ希望ノ光――

「そう、そうだよ。お願いだから、勝利がいる場所を教えて！」

――ソレヲ知ッテ何ヲスル？――

「何をするって、決まってんじゃない！　勝利を助けに行くんだから！」

瑛子は声を上げた。こうしている間にも、勝利があぶないかもしれない……そんな不安が瑛子の胸をいっぱいにした。

――貴様ガ光ノ元ヘ行ッテ何ニナル？――

相変わらずの淡々とした受け答えに、瑛子は苛立った。

「そんなの行ってみないと分かんないでしょ！」

――……何ガ待ッテイルカ分カラナイガ、貴様ノ心ヲ信ジヨウ――

そう声が聞こえた途端、辺りが眩いほどの白い光に覆われた。瑛子は思わず目を閉じ、その場にうずくまった。

「何、何なのよっ！？」

自分が光に包まれたと思った瞬間、今度はふわりと風に乗るように体が宙に浮いた。瑛子は何がなんだか分からなくて身動き一つ出来なかった。

「……勝利がいるところへ連れてってくれるの？」

瑛子がそう呟くと、それに答えるように瑛子の体が強い風で舞い上がった。

（あの声は、この光は何？）

白く、どこか懐かしさを感じる光に包まれた瑛子は、幼い頃に感じた母親の暖かいぬくもりを思い出していた。

（……でも、あたしは知ってる気がする。遠い遠い昔、ずっとずっと昔に会ったことがある）

どれくらい眠っていたのだろうか。白い光の中は暖かく、居心地が良いものだった。瑛子はゆっくりと目を開けた。

「ここは……？」

辺りを見回すとたくさんの大木が立っている森の中にいた。（この近くに勝利がいるのかしら……？）

瑛子は立ち上がり、勝利の名前を呼びながら歩き出した。そんな瑛子の姿を草影から見つめる怪しい人物がいた。ワルーモノ四天王ベルゼだ。

（あの娘、突然現れやがった。しかも光に包まれて……何者だ？）

ちっと舌打ちをしてベルゼは、瑛子に気付かれないよう、そっと後を追った。

（ただの人間なら食うだけだが、あの娘は何か違う）

瑛子に気付かれないようベルゼは空から後を追っている。瑛子は勝利の名前を呼びながら林の中を彷徨った。

（地球の光の名前を呼んでいるってことは、奴と関わりがあるってことか）

ベルゼはにやりと笑った。

（こいつは使えるぜ。……まぁ今頃、俺の作った空間の中で奴は死んでるだろうけどな）

勝利の歪む顔を想像したベルゼはくっくっと笑った。ベルゼの作った空間はベルゼにしか解くことが出来ない。よって、その空間に入ったら最期、ベルゼを倒さない限り脱出することは不可能なのだ。

（バカらしい。探したって無駄だぜぇ？　外から浸入することも出来ないんだからな）

ベルゼはまた声を殺して笑い、地上で歩き回っているはずの瑛子に目をやった。しかし、ベルゼの血のように真っ赤な眼は瑛子の姿を捕らえる事が出来なかった。いつの間にか瑛子を見失っていたらしい。

「ちっ。面倒くせぇな」

（気になるが、まぁ放っておいて大丈夫だろ。地球の光自体は消えるんだから）

ベルゼはくるりと体の方向を正反対に向けた。そろそろアラキモデウスが光を消している頃だろうと、自分が作った空間の場所へ飛んだ。

そのときだった。

キィィン……と、脳天を貫くような音がベルゼの耳に響いた。

「俺の空間が破れた……？」
ざわりとベルゼの体に寒気が走った。ベルゼは猛スピードで空を飛び、アラキモデウスがいる場所へと向かった。

（ずいぶん奥まで来ちゃったけど……ちゃんと帰れるのかな？）
そのときは勝利に抱っこしてもらおっと……って、その勝利を見つけないといけないのよね。瑛子は足を止めて辺りを見回した。どこを見ても木、木、木ばっかりだ。
「勝利ーっ！」
瑛子の声は静かな森の中でこだました。しかし、勝利の声はおろか、先程まで聞こえていた小鳥の囀りや、風の音も聞こえない。この空間だけが無の状態のようだ。
瑛子は身震いした。何故だか、今いる場所が地球のようでそうではない気がしたのだ。……それもそのはず。今まさに瑛子はベルゼの作った空間の中に、知らず知らずのうちに迷い込んでしまったのだ。
「勝利ー！　聞こえてたら返事してぇーっ！」
瑛子は顔を青くしながらその周辺を歩き回った。
（分かんないけど、はやくここから逃げなきゃいけない気がする）
「勝利ーっ！」
「バカらしい。呼んでも無駄だぜ」
突然、瑛子の背中の方から声が聞こえた。驚いた瑛子は声がした方へ振り返った。そこには人間に似て、人間とはかけ離れた生物が立っていた。真紅の瞳に深い苔のような色の体。瑛子は一瞬でその者が宇宙の侵略者であることが分かった。
「ワルーモノ……」
「そう、俺はワルーモノ、ベルゼ」
ベルゼはにやりと笑い、ゆっくりと瑛子に近付いた。その速度と

比例して、ゆっくりと瑛子は後退りした。
「お前はただの人間じゃないよな？　俺の空間を破るなんて、他の四天王でも無理な話だってーのに」
「空間？　四天王？」
（何言ってるんだろう、わけ分かんない）
瑛子の体がかたかたと震えたが、瑛子はぎゅっと拳に力を入れ、ベルゼを睨付けた。
「勝利の居場所を教えなさい！」
ワルーモノを目の前にしても怯まない瑛子を見たベルゼは、また口元を緩ませ、にやにやと卑しい顔になった。
「俺、あんたみたいな強がり女を食べる瞬間が一番快感なんだよね。……いいぜ、あんたの愛しい光に会わせてやるよ」
ベルゼはぱちんっと指を鳴らした。するとただの森の景色があったベルゼの後方に、大きな体のアラキモデウスと、地面にめり込んで倒れている勝利の姿が現れた。
「勝利っ！」
瑛子は声を震わせた。
「ひ、光、今死んだ」
アラキモデウスが涎を垂らしながら笑った。瑛子は無我夢中で勝利に駆け寄ろうとしたが、ベルゼが瑛子の腕を掴んだ。
「あんたは俺らと一緒に来てもらうぜ」
「……なせ」
恐ろしく低い瑛子の声がベルゼを震え上がらせた。
（な、なんだ、この俺が震えてる？　こんな小娘に恐れてる？）
「その汚い手を離せ」
「……っ！」
ベルゼは躊躇したが瑛子の言うとおり手を離した。そうしないとこっちが消されてしまう……ベルゼの本能がそう告げていた。アラキモデウスが頭にクエスチョンマークを付けてベルゼに聞いた。
「ど、ど、どうして手はな、離した？」

「……バカやろう、分かんねぇのか。あいつ、さっきまでの人間じゃねぇ。まるで別人、何かに取り憑かれたみたいな……」
そこまで答えてベルゼははっとした。
（取り憑かれた……人間じゃない……空間が破けた……）
「もしかして、あいつ……！」
ベルゼが一つの答えに辿り着いたとき、瑛子は勝利のすぐ側に駆け寄っていた。
「勝利、小さき地球の希望の光」
「……」
すでに事切れている勝利は瑛子の声に反応しない。瑛子はそっと勝利の体に向けて両手の手の平を向けた。
「地球の光よ、森羅万象の源よ、我が身体を伝いて注げ」
そう瑛子が唱えたとき、瑛子の手にぽつぽつと小さな白い光が現れた。次第にそれは数を増して、勝利の体をすっぽりと包み込んだ。
「やばい、アラキモデウス、はやくあの女を何とかしろ！」
ベルゼがアラキモデウスを急かした。けれど、この状況をうまく飲み込めないアラキモデウスは、その場から動く事が出来なかった。それだけでなく、瑛子が発する光にみとれている。
「ああ、あ、あの光、綺麗だ……な」
「お前、何言ってんだよ！　はやくあの女を止めねぇと、光が息を吹き返す……！！」
まごまごしているベルゼ達を余所に、勝利を包んでいた光はだんだんと輝きを増していった。そしてカッと一瞬だけ、その白さで世界を覆い尽くした。

## LIGHT　11：吹き返す光

そこは真っ暗な闇が続いていた。
（ここは……？）
勝利はゆっくりと目を開けた。何も見えない、光のない世界だった。
（そうだ、俺死んだんだ）
勝利はワルーモノ四天王アラキモデウスと戦い、アラキモデウスの巨大な足で踏みつぶされた。それ以降の記憶が全くない。目が覚めたらこの異世界にいたのだ。
（ここが死後の世界ってやつ？　何だか辛気臭いなぁ）
勝利はふっと苦笑いをして、また目を閉じた。
（もう終わったんだ……地球はもう）
勝利の瞼の裏にぼんやりと瑛子の顔が浮かんだ。瑛子の笑顔を見ていると、つられて勝利の頬が緩んだ。
「瑛子、ごめんな。結局お前を守れなかった。怒ってるだろ？」
瞼の瑛子は返事をしない。ただにっこりと笑っている。そんな瑛子を見て、もう二度と瑛子に逢えないことを改めて知った。勝利の目に涙が光った。
「……くそぉっ」
頬を伝う涙を手の平で拭う。地球を守れなかった、瑛子を守れなかった悔しさが涙になって溢れて零れた。
「くそぉぉぉっ！」
――出来る事なら。願いが一つだけ叶うなら。もう一度、地球を守るために俺に力を……地球の希望の光を！
そう強く願ったときだった。勝利の愛する少女の声が勝利の耳に届いた。勝利は驚いて目を開けた。
「……瑛子？」
紛れもなく、そこに立っていたのは瑛子だった。しかしどこか様

子がおかしい。瑛子のようで瑛子ではない、別の誰かのような雰囲気を感じた。
「地球の希望の光。再び我と共に立ち上がれ」
そう言った瑛子はすっと人差し指を勝利に向けた。すると真っ暗だったこの世界に白い光がぽつぽつと現れた。それは始めは弱々しい光だったが、数が増え始め、闇しかなかったこの場所が光で溢れるようになった。暗闇に慣れていた勝利は思わず目を閉じた。
「こ、これは……地球の力」
今まで空っぽだった勝利の身体にみるみると力が沸き上がっていく。勝利の願いが通じた瞬間だった。
力の充電を完了した勝利は瑛子を抱き締めた。
「瑛子、お前は……」
勝利に抱かれるまま、瑛子は何も話さなかった。何かに取り憑かれているように瞳はどこか虚ろで、自分の意志を奥底に隠してしまっている。それでも勝利は瑛子に話しかけた。
「瑛子、ありがとな。俺もう一度頑張るから、頑張るからさ。……元の瑛子に戻ってくれよ」
「……この戦いが終われば、全て話そう。ワルーモノのこと、地球のこと、そして……瑛子のことを」
(瑛子、お前はじっちゃんの言う通りだったんだな)
瑛子の言葉を聞いて、勝利の頭に木山所長の言葉が浮かんだ。
――瑛子ちゃんは何かしら母『コア』と関係があるのかもしれん――
(俺も男だ。何聞いたって驚かない……)
ふぅと一息ついた勝利は、
「分かった。全部話してくれ」
と、ぎゅっと瑛子を抱き締めている腕に力を込めた。
それを聞いた瑛子が短い呪文を唱えると、光溢れていた世界から、ベルゼ達のいる元の世界に一瞬にして戻ってきた。

「ひ、ひか、光っ」
アラキモデウスが甦った地球の光を見て慌てた。
「なな、ななな……」
「ちったぁ、落ち着けよ。あの娘のせいだよ。……やっぱり食っておくべきだったか、バカらしい」
ベルゼが短く舌打ちをして、再び立ち上がった勝利を見た。どことなく自信に溢れているように見えた。明らかに初めに見た時と印象が違う。
（……一旦、引き返すか？）
ベルゼはぴょんっとアラキモデウスの肩に飛び乗った。
「一旦引き返すぞ」
「どう、どうして？」
「バカ、よく見てみろ。あの光は今までの光じゃないし、あの娘もおかしい。俺の考えじゃあ、あの娘は……」
「でも……」
アラキモデウスがもごもごと言葉を濁した。その顔はいたずらが見つかってしまった三歳児のようだ。ベルゼが、けっと悪態を吐いてアラキモデウスを急かした。
「でも、ル、ルル、ルシガルにおこ、怒られる……かも」
「ルシガルなんか怖くねぇよ。それに怒られることはねぇ。こっちは新しい情報を手に入れたんだからな」
そうアラキモデウスに耳打ちして瑛子を見た。瑛子もベルゼの視線に気付き、きっと睨みかえした。
「さっきはよくもやってくれたな」
勝利がゆっくりとアラキモデウスに近付いた。ゆらりゆらりと歩く今の勝利の姿に、ベルゼとアラキモデウスは背筋が凍った。
「な、なんで俺がこんなプレッシャーを……」

ベルゼは冷や汗を流しながら、急いでぱちんっと指を鳴らした。すると、風船が割れるような音が響いたと同時に、まわりの風景が元の地球の風景に変わった。ビルが立ち並び、スーツ姿のサラリーマンがせかせかと歩いている。

「え、ええ？」

勝利は思う存分、戦うつもりでいたので、急に目に飛び込んで来た渋滞中の車や、人々の往来に頭がついていかなかった。すると、後ろから瑛子の声が聞こえた。

「四天王達は星へ帰ったみたいだ」

「瑛子……」

勝利はすっかり別人の瑛子を見て胸が痛んだ。

「時間がない。ひとまず全てを話そう。どこか話す場所はあるのか？」

「あ、えっと、じっちゃんの研究所だったら大丈夫だと思います」

勝利は瑛子と一緒に木山研究所へ向かった。

「あなた方が地球の光の同志か？」

木山所長と南は、見た目は変わらないのに、口調と態度が変わってしまった瑛子に目を丸くした。勝利は瑛子の後ろで溜め息を吐いた。

「これは……どういうことかのぉ？」

木山所長は開いた口が塞がらない。勝利は南にお茶を用意してくれるよう頼み、

「じっちゃんの言ってたことが本当になったんだよ」

と、少し不機嫌な雰囲気を出して椅子に座った。

「まずは何を話そうか？」
話を切り出そうとする瑛子を置いて、とりあえず、勝利と木山所長、南の三人はお茶を飲み一息ついた。
「何が何だかさっぱりじゃ」
「ええ、私もです」
南がふぅと溜め息を吐いた。勝利は黙って椅子に座っていた。
「勝利、説明してくれないか？」
木山所長が勝利に促した。勝利は一口、熱いお茶を飲み、四天王アラキモデウスと戦ったことから今までのことを話した。
「空間を操る四天王か……これはまた特別な力を持った奴等じゃな」
木山所長がうんと唸った。
「にしても、一度死んだなんて……そして生き返っただなんて信じられない話だわ」
南がまじまじと勝利を見た。勝利は少し恥ずかしくなって目を伏せた。
「そしてその暗い世界に瑛子ちゃんが現れたんじゃな？」
勝利はこくんと頷き、瑛子を見た。三人の視線が瑛子に集まった。
「そうだな。私のこと、瑛子のことから話そうか」
瑛子は一息ついて、勝利達の顔に目配せをして口を開いた。
「私はこの地球の光の源……母『コア』と呼ばれるものだ」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9060a/

地球の希望の光

2010年10月9日07時45分発行